

学修成果アセスメントプラン

令和6年7月

新潟大学

目 次

第1部 学修成果アセスメントプラン策定の概要

- 1 策定の趣旨
- 2 学修成果アセスメントプランの概要
- 3 策定体制

第2部 学部・プログラムのアセスメントプラン

- 1 人文学部
- 2 教育学部
- 3 法学部
- 4 経済科学部
- 5 理学部
- 6 医学部医学科
- 7 医学部保健学科
- 8 歯学部
- 9 工学部
- 10 農学部
- 11 創生学部

第1部 学修成果アセスメントプラン策定の概要

1 策定の趣旨

教育の内部質保証において、DP（ディプロマ・ポリシー）に示す到達目標に照らした学修成果の評価とこれに基づくカリキュラム等の改善が重視されています。文部科学省が令和2年1月に示した「教学マネジメント指針」では、アセスメントプラン（学修成果の評価について、プログラム共通の考え方や尺度、達成すべき質的水準及び具体的実施方法等について定めた学内方針）に基づく学修成果の把握・可視化と適切な活用、またこれらの情報公開が求められています。

本学では、以上のアセスメントプランに相当するものとして、プログラム毎に定めた「学位プログラム評価指針」があり、評価基準として「学修成果の評価と達成状況」を設け、各プログラムで目標とする学修成果に学生が到達したかどうか状況を把握する方法について明記しています。

ただし、その内容は概括的であり、必ずしもDP全体に明確に対応する形で評価方法が示されているわけではなく、さらに、評価の具体的な実施時期や周期、その結果をどのように活用するのか等、評価の実施からカリキュラム改善に至る行程や体制が不明確な点など、実効性のあるアセスメントプランとしては改定の必要がありました。

こうした状況を踏まえ、本学では、学位プログラム評価指針のうち「学修成果の評価と達成状況」を改定し、学修成果アセスメントプランとして公表するものです。

2 学修成果アセスメントプランの概要

学修成果アセスメントプランは、次の2種類より構成されます。

(1) 学修成果の評価に係る基本方針

学部としての学修成果の評価に係る基本方針を示したものです。

学部共通の学修成果の評価に係る実施目的、評価の実施及び結果の活用、情報の公表、実施体制等に係る方針を記載しています（表1）。

(2) 学修成果の評価に係る実施計画

各学位プログラムの、学修成果の評価に係る実施計画を示したものです。

プログラム毎の各到達目標に対する評価に関して、評価方法・指標、対象学年、実施時期、結果の活用方法等に関する方針を記載しています（表2）。

3 策定体制

各学部を主体とし、「学修成果の評価に係る基本方針」は学部毎に、「学修成果の評価に係る実施計画」は学位プログラム毎に策定しました。

表1 学修成果の評価に係る基本方針（学部別）記載様式

| | | |
|----------------|--------------|--|
| 基本方針 (学部共通) | 実施目的 | |
| | 実施体制 | |
| | 評価の実施及び結果の活用 | |
| | 情報の公表 | |

表2 学修成果の評価に係る実施計画（プログラム別）記載様式

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標 (目標としての学修成果) | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---------|------|----------------------------|-----------|-------|-------|---------|----|-----------|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| 間接評価 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| その他 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

第2部 学部・プログラムのアセスメントプラン

各学部の基本方針及び各プログラムの実施計画を掲載

<掲載順>

- 1 人文学部
- 2 教育学部
- 3 法学部
- 4 経済科学部
- 5 理学部
- 6 医学部医学科
- 7 医学部保健学科
- 8 歯学部
- 9 工学部
- 10 農学部
- 11 創生学部

1 人文学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて学位プログラム委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

1 人文学部
(1) 心理・人間学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|---|--|---|--|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 心理学分野における実験・研究法科目（心理学実験A、心理学実験B、心理学統計法、心理学研究法）の単位修得状況及び成績分布 | 2 | 人間の行動や心の働きを科学的に評価する手法を理解し、その基礎を習得する。 | 人間の行動や心の働きについて、科学的に妥当な手法によって分析し、その結果を適切な形式で報告することができる。 | 問題の解決に向けて、情報や知識を複眼的、論理的に構築することができる。 | 人間の関わる諸問題に科学的な態度をもって取り組むことができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 基礎演習・基礎講義・研究法科目（所定の科目（※1））の単位修得状況及び成績分布 | 2 | 人間の行動や心の働きを科学的に評価する手法を理解し、その基礎を習得する。 哲学・倫理・宗教・芸術について、その歴史と理論を学び理解する。 | 人間の諸特性について、思想的洞察や実証的分析を通じた検討を行うことができる。 人間の行動の仕組みや心の働きについて、心理学的知見に基づいて理解、説明することができる。 専門職（公認心理師、臨床心理士、心理職公務員、研究者など）の職務のなかで、心理学の専門的知見を駆使することができる。 | 外国語で表現された文章の読解や作成を行い、それをコミュニケーションのために用いることができる。 論理的に構造化された言語表現を用いて、自らの考えを発信することができる。 | 他者とのつながりを築き、互いを尊重しながら対話を営み、問題の解決に向けて協力することができる。 人間の関わる諸問題に科学的な態度をもって取り組むことができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 卒業論文（口述試験含む）の評価 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| その他 | 卒業生に対する面接調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標のうち、とくに汎用的能力、態度・姿勢の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 雇用先へのアンケートないしヒアリング調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 6年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |

※1 【心理学分野】 【人間学分野】

| 基礎講義・実習・研究法 | 基礎演習 | 基礎講義・実習・研究法 | 基礎演習 |
|--|---------|--|--|
| 心理学概論A 心理学概論B 知覚・認知心理学A 学習・言語心理学 社会・集団・家族心理学 産業・組織心理学 | 心理学基礎演習 | 人間学概説 哲学概説 倫理学概説 西洋哲学史概説 宗教学概説 芸術学解説A 芸術学解説B 古典語A 古典語B 古典語C 人間学研究法A 人間学研究法B | 人間学基礎演習A 人間学基礎演習B 人間学基礎演習C 人間学基礎演習D |

1 人文学部
 (2) 社会文化学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|------------------------|------|---|--|--|--|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 所定の科目（※1）の単位修得状況及び成績分布 | 2 | <ul style="list-style-type: none"> 人間の社会文化的な営みについて、広範な視点から理解する 本プログラム各領域の理論と基礎的な知識を身につける 社会・文化の多様性と共通性、変遷過程を理解する | <ul style="list-style-type: none"> 本プログラム各領域において用いる文献資料や非文字資料を適切に理解・分析できる 本プログラム各領域の理論・方法論を活用して社会文化的な事象について説明できる 本プログラム各領域で必要とされる調査の技法を身につけて実施し、結果を活用・発信できる | <ul style="list-style-type: none"> 自ら課題を設定し、複数の視点から批判的・総合的に考察し、解決・解明に向けて探求していくことができる データ・的確な根拠にもとづき論理的に思考することができる 自らの考えを様々な手段で的確に表現・発信できる 外国語によるコミュニケーション能力を高め、異文化理解を深める | <ul style="list-style-type: none"> 人間、社会、文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み、主体的に取り組むことができる 異なる文化・価値観をもつ様々な人々と協働することができる 身近な課題の探究を通して、地域社会・国際社会に貢献する | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 卒業論文（口述試験含む）の評価 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成（カリキュラム）の見直しをおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| その他 | 卒業生に対する面接調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | | | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標のうち、とくに汎用的能力、態度・姿勢の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |
| | 雇用先へのアンケートないしヒアリング調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 6年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成（カリキュラム）の再検討をおこなう（学部学位プログラム委員会）。 |

※1
 ・一つの初修外国語4単位分の科目
 ・人文初年次演習
 ・人文入門、心理人間学入門、社会文化学入門A、社会文化学入門B、言語文化学入門A、言語文化学入門Bのうちから2科目

1 人文学部
(3) 言語文化学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|--|--|---|--|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 本プログラムが提供する入門講義、基礎講義・実習・研究法、基礎演習科目の単位修得状況(※1)及び成績分布 | 2 | <ul style="list-style-type: none"> 言語・文学・文化研究の基本的方法・理論に基づき、言語文化を理解することができる。 言語文化の多様性と共通性および変遷過程を知り、個別の言語文化を広い視野から位置づけ理解することができる。 言語文化を周辺諸学問との影響関係の中で理解することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 言語・文学・文化の各領域に関わる文献史料を適切に理解・分析することができる。 言語・文学・文化の各領域の研究手法・理論に基づき、言語文化に関する研究課題を深めることができる。 自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって情報を発信することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 多様な文化的状況への理解に基づき、社会における様々な問題を発見・理解することができる。 問題の解決に向けて、情報を多角的に収集して分析し、効果的に活用することができる。 他者と情報を共有しつつ、問題解決に向けた議論を構築することができる。 自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって、異文化を背景とする他者とも相互理解を図ることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 人間、社会、文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み、主体的に取り組むことができる。 身近な課題の探究を通して、地域社会に貢献することができる。 異文化に対する理解を深め、調和ある国際社会の形成に貢献することができる。 社会のなりたちとその歴史を深く理解し、人類が生み出した文化に敬意を持ち、その価値を後世に正確に伝えることができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成(カリキュラム)の見直しをおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |
| | 卒業論文(口述試験含む)の評価 | 4 | <ul style="list-style-type: none"> 言語・文学・文化研究の基本的方法・理論に基づき、言語文化を理解することができる。 言語文化の多様性と共通性および変遷過程を知り、個別の言語文化を広い視野から位置づけ理解することができる。 言語文化を周辺諸学問との影響関係の中で理解することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 言語・文学・文化の各領域に関わる文献史料を適切に理解・分析することができる。 言語・文学・文化の各領域の研究手法・理論に基づき、言語文化に関する研究課題を深めることができる。 自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって情報を発信することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 多様な文化的状況への理解に基づき、社会における様々な問題を発見・理解することができる。 問題の解決に向けて、情報を多角的に収集して分析し、効果的に活用することができる。 他者と情報を共有しつつ、問題解決に向けた議論を構築することができる。 自身が専門とする言語文化に関する知識と高度な言語運用能力によって、異文化を背景とする他者とも相互理解を図ることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 人間、社会、文化に関わる諸問題に多角的・分析的にアプローチを試み、主体的に取り組むことができる。 身近な課題の探究を通して、地域社会に貢献することができる。 異文化に対する理解を深め、調和ある国際社会の形成に貢献することができる。 社会のなりたちとその歴史を深く理解し、人類が生み出した文化に敬意を持ち、その価値を後世に正確に伝えることができる。 | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成(カリキュラム)の見直しをおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じ到達目標に対応する科目構成(カリキュラム)の見直しをおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |
| その他 | 卒業生に対する面接調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成(カリキュラム)の再検討をおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標のうち、とくに汎用的能力、態度・姿勢の見直し、科目構成(カリキュラム)の再検討をおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |
| | 雇用先へのアンケートないしヒアリング調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 6年毎 | 調査結果をもとにDPの到達目標全般の見直し、科目構成(カリキュラム)の再検討をおこなう(学部学位プログラム委員会)。 |

※1

| 科目名 | | | | | |
|--------------|------------|--|--------------|--------------|---------------|
| 言語文化学入門A | 日本文学概説B | 英米言語概説A | 日本語文化実習A | 西洋言語文化研究法C | ドイツ言語文化基礎演習B |
| 言語文化学入門B | 日本文学概説C | 英米言語概説B | 日本語文化実習B | 西洋言語文化研究法D | フランス言語文化基礎演習A |
| 言語学概説A | アジア言語文化概説A | ドイツ言語文化概説A | 日本語文化実習C | 言語学基礎演習 | フランス言語文化基礎演習B |
| 言語学概説B | アジア言語文化概説B | ドイツ言語文化概説B | 日本語文化実習D | 日本語文化基礎演習A | ロシア言語文化基礎演習A |
| 日本・アジア言語文化概説 | アジア言語文化概説C | フランス言語文化概説A | アジア言語文化研究法A | 日本語文化基礎演習B | ロシア言語文化基礎演習B |
| 日本語文化論 | 西洋文化概説 | フランス言語文化概説B | アジア言語文化研究法B | アジア言語文化基礎演習 | |
| 日本語学概説A | 西洋言語概説 | Introduction to Transcultural Encounters B | デジタル文献情報学研究法 | 英米言語文化基礎演習A | |
| 日本語学概説B | 英米文化概説A | ロシア言語文化概説A | 西洋言語文化研究法A | 英米言語文化基礎演習B | |
| 日本文学概説A | 英米文化概説B | ロシア言語文化概説B | 西洋言語文化研究法B | ドイツ言語文化基礎演習A | |

2 教育学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいてカリキュラム検討委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

2 教育学部
学校教員養成プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|----------|--|--|---|--|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 教育の基礎的理解に関する科目等 [教職概論、教育・学校心理学A、現代教育学概論など] の単位修得状況 | 1・2・3年 | 教員に必要とされる学校教育に関する理論の基礎を習得できる。 | 教員に必要とされる学校教育に関する理論を深めるための方法の基礎を習得できる。 | 基礎的な理論の活用を通じた学校教育に関する現状や諸課題の考察に資する教員に必要な論理的な分析や課題解決の手法を習得できる。 | 自らの既有的な教師像・学校像を対象化して捉える視野・姿勢をもつことができる。 | 年度末 | 毎年 | 教務委員会で評価指標に基づいた評価を行なうとともに、必要に応じてカリキュラム検討委員会や教育学部FDを開催して到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |
| | 教科及び教科の指導法に関する科目 [教科の専門事項：小学校○○(各教科)、各教科の指導法：○○科教育法(初等)、○○科教育法(中等)など] / 特別支援教育に関する科目 (特別支援教育の本質と目標、障害児生理学、知的障害指導論など) の単位修得状況・成績分布 | 2・3年 | 教科の内容とその指導法 / 特別支援教育の基礎理論および心身に障害のある幼児・児童・生徒の心理・生理・病理とその教育課程や指導法に関する理論的知識を習得できる。 | 教科の内容とその指導法に関する知識 / 特別支援教育の基礎理論および心身に障害のある幼児・児童・生徒の心理・生理・病理とその教育課程や指導法に関する知識とを結びつけ、専門とする校種・教科の学習指導を構成する方法を修得できる。 | 諸学問分野の理論的知識の活用を通して、教員として必要とされる情報収集や論理的な分析・課題解決の手法を習得できる。 | | 年度末 | 毎年 | 教務委員会で評価指標に基づいた評価を行なうとともに、必要に応じてカリキュラム検討委員会や教育学部FDで到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |
| | 教育実践に関する科目 [初等教育実習、中等教育実習、教職実践演習(初等)、教職実践演習(中等)] の単位修得状況 | 3・4年 | | 教育に関する理論知と実践知を結びつけることにより、著しい支障を来すことなく学校教育の現場での教科指導・学級経営等を実習として遂行できるとともに、実習を含む教職課程の学びを総体として省察できる。 | 教育現場での実習を通して、教師として必要となる人間関係を形成する能力を涵養する。 | 教育現場での実習とその振り返りを通して、教師の仕事の特質の認識を深めるとともに、教職への関心・意欲を高めることができる。 | 年度末 | 毎年 | 教務委員会で評価指標に基づいた評価を行なうとともに、必要に応じてカリキュラム検討委員会や教育学部FDで到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |
| | 卒業研究の成績分布 | 4年 | 教育や児童・生徒の現状、初中等教育における各教科の教育や諸領域の活動に関する理論的知識を深めることができる。 | 教育や児童・生徒の現状、初中等教育における各教科の教育や諸領域の活動をめぐる各自の課題意識に基づく研究をまとめることができる。 | 情報収集・論理的な分析・課題解決に関する手法の習熟を図るとともに、自らの研究成果を表現するための能力を深化できる。 | | 年度末 | 毎年 | 教務委員会で評価指標に基づいた評価を行なうとともに、必要に応じて教育学部FDを開催して到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |
| 間接評価 | 教職実践ポートフォリオにおける履修カルテ・自己評価カルテ | 1・2・3・4年 | ディプロマ・ポリシーに掲げられた到達度の自己評価 | | | | 年度末 | 毎年 | カリキュラム検討委員会や教育学部FDなどで、必要に応じて到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |
| その他 | 卒業生アンケート | 卒業生 | ディプロマ・ポリシーに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | カリキュラム検討委員会や教育学部FDなどで、必要に応じて到達目標・授業内容・方法の吟味およびそれらの関係の再検討を図る。 |

3 法学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて学位プログラム評価実施委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

3 法学部
(1) 法学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|------|--|--|--|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 人文社会科学入門（法学）、リーガル・システムの単位修得状況・成績分布 | 2年 | ・法学の基礎的な概念・用語を理解し、特定の法分野の理論・構造を体系的に理解している。 | ・個別の事案に対し、どのように法を適用するかを説明することができる。 | | ・基本的人権を擁護する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。 ・社会正義を追求する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。 | 5月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。毎年2月に実施される科目毎のFDにおいて検討する。 |
| | JRP発表会の評価およびジュニア・リサーチ・ペーパーの成績取得状況・成績分布 | 4年 | | ・法や政治の諸事象の問題の所在を認識し説明することができる。 ・自分の有する情報や相手の意見を踏まえ、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく、かつ、正確に伝えることができる。 | ・自ら問題を発見し、解決策を立案し、解決に導くことができる。 ・自分の有する情報や相手の意見を踏まえ、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく、かつ、正確に伝えることができる。 | ・法学を高い意欲のもと主体的に学ぶことができる。 ・多様な意見に耳を傾けつつ積極的に議論に参加することができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| 間接評価 | JRP発表会のアンケート調査 | 4年 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己点検 | | | 2月 | 毎年 | 調査結果をもとに、教育課程における集大成科目のあり方を到達目標に照らして再検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| | 進路内定状況調査 | 4年 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己点検 | | | 4月 | 毎年 | 調査結果をもとに、学務委員会において教育課程における科目構成を到達目標に照らして再検討する。 |
| | 進学先大学院への本学卒業生の動向調査 | 卒業生 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己点検 | | | 4月 | 毎年 | 調査結果をもとに、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| その他 | 法学検定合格者数・合格率、公務員試験合格者数の調査 | 全学年 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己点検 | | | | 毎年 | 調査結果をもとに、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己点検 | | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、学務委員会において教育課程における科目構成を到達目標に照らして再検討する。 |

3 法学部
(2) 法曹養成プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|------|--|--|--|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 人文社会科学入門（法学）、リーガル・システムの単位修得状況・成績分布 | 2年 | ・法学の基礎的な概念・用語を理解し、特定の法分野の理論・構造を体系的に理解している。 | 個別の事案に対し、どのように法を適用するかを説明することができる。 | | ・基本的人権を擁護する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。 ・社会正義を追求する姿勢を持って勉学に取り組むことができる。 | 5月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。毎年2月に実施される科目毎のFDにおいて検討する。 |
| | JRP発表会の評価およびジュニア・リサーチ・ペーパーの成績取得状況・成績分布 | 4年 | | ・法や政治の諸事象の問題の所在を認識し説明することができる。 ・課題の解決方策について、法学の観点から自説を展開することができる。 | ・自ら問題を発見し、解決策を立案し、解決に導くことができる。 ・自分の有する情報や相手の意見を踏まえ、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく、かつ、正確に伝えることができる。 | ・法学を高い意欲のもと主体的に学ぶことができる。 ・多様な意見に耳を傾けつつ積極的に議論に参加することができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| 間接評価 | JRP発表会のアンケート調査 | 4年 | | | | | 2月 | 毎年 | 調査結果をもとに、学務委員会において教育課程における集大成科目のあり方を到達目標に照らして再検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 進路内定状況調査 | 4年 | | | | | 4月 | 毎年 | 調査結果をもとに、学務委員会において教育課程における科目構成を到達目標に照らして再検討する。 |
| | 連携先法科大学院への本学卒業生の動向調査 | 卒業生 | | | | | 4月 | 毎年 | 調査結果をもとに、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| その他 | 法学検定合格者数・合格率、公務員試験合格者数の調査 | 全学年 | | | | | | 毎年 | 調査結果をもとに、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを学務委員会において行う。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、学務委員会において教育課程における科目構成を到達目標に照らして再検討する。 |

4 経済科学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて学務委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

4 経済科学部

(1) 経済学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|----------|--|--|--|---|-----------------------|---|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | アドバイザー教員による学修状況（単位取得状況・GPA・成績内容）の確認と指導 | 2年 | | | ・外国語を利用して、異文化について幅広く情報を集めることができる。 ・数学や統計学の基礎知識を用いて、基本的な演算やデータに基づいた客観的な分析を行うことができる。 | ・社会の多様な問題に対して、専門分野および周辺領域の知識を活用して積極的に取り組む態度を備えている。 | 4月・10月 | 毎年 | 教員間で情報共有し、学生のより適切な履修と学修が実現されるよう、知見を深める。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| | 主としてプログラム基礎科目（入門ミクロ経済学、入門マクロ経済学、入門社会経済学、統計入門）の単位取得状況と成績内容に加えて、中核科目（ミクロ経済学Ⅰ、マクロ経済学Ⅰ、経済数学Ⅰ、計量経済学Ⅰ、アメリカ経済論Ⅰ、アジア経済論Ⅰ、IE経済論、ロシア経済論、世界経済史、財政学Ⅰ、金融論Ⅰ）の履修状況・単位取得状況および成績内容 | 2年 | ・個々の家計や企業の行動を理解し、市場の役割についての知識を修得している。 ・現代の経済社会の成り立ちや仕組みを体系的に把握している。 ・市場社会の世界的な発達と変容を網羅的に理解している。 | ①経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。 ②統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。 ③世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的な能力を涵養することができる。 ④世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できる。 | | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じて到達目標の見直しを行う。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| | 主指導教員による学修状況（単位取得状況・GPA・成績内容）の確認と指導 | 3年 4年 | | ①経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。 ②統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。 ③世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的な能力を涵養することができる。 ④世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できる。 | ・外国語を利用して、異文化について幅広く情報を集めることができる。 ・数学や統計学の基礎知識を用いて、基本的な演算やデータに基づいた客観的な分析を行うことができる。 ・読み手や聞き手の立場に立って、自分の意見を論理的・体系的に伝達すると同時に、他者の意見を聞くことができる。 ・物事を論理的に考察することができる。 ・幅広く、深い教養をもとに、様々な現象を考察し、その本質を理解することができる。 | ・経済社会で現実に行き起きている問題に自ら気づき、経済理論の基礎知識をもとに理解しようとする自発的な行動をとることができる。 ・社会の多様な問題に対して、専門分野および周辺領域の知識を活用して積極的に取り組む態度を備えている。 ・文化や言語の異なる人も含めて、他者の多様な考えに共感し、それを尊重する態度を備えている。 ・企業や個人の行動が社会にどのような影響を与えるかを考え、社会的責任を踏まえた行動ができる。 | 4月・10月 | 毎年 | 教員間で情報共有し、学生のより適切な履修と学修が実現されるよう、知見を深める。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| | プログラム中核科目（ミクロ経済学Ⅰ、マクロ経済学Ⅰ、経済数学Ⅰ、計量経済学Ⅰ、アメリカ経済論Ⅰ、アジア経済論Ⅰ、IE経済論、ロシア経済論、世界経済史、財政学Ⅰ、金融論Ⅰ）の単位取得状況・成績内容を中心とし、その他専門科目（経済数学Ⅱ、ゲーム理論、ミクロ経済学Ⅱ、マクロ経済学Ⅱ、計量経済学Ⅱ、組織の経済学Ⅰ・Ⅱ、市場と組織の理論、応用ミクロ経済学、国際貿易論、環境経済システム論Ⅰ・Ⅱ、金融論Ⅱ、国際マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ、社会思想史、経済学史、アメリカ経済論Ⅱ、比較経済体制論、アジア経済論Ⅱ、開発途上国経済論、国際開発論、行財政入門、財政学Ⅱ、公共経済学Ⅰ・Ⅱ、公共選択論、NPO論、文化経済学、地方財政制度論、地方財政運用論、労働経済学Ⅰ・Ⅱ）の履修状況・単位取得状況・成績内容 | 3年 | ・個々の家計や企業の行動を理解し、市場の役割についての知識を修得している。 ・集計された家計や企業の行動を理解し、景気変動とそれに対する政策対応の知識を修得している。 ・現代の経済社会の成り立ちや仕組みを体系的に把握している。 ・市場社会の世界的な発達と変容を網羅的に理解している。 ・経済学の観点から様々な事象を理解している。 | ①経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。 ②統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。 ③世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的な能力を涵養することができる。 ④世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できる。 | | | 原則3月（進級の時期によっては9月に実施） | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じて到達目標の見直しを行う。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| | 卒業論文とその作成過程に対する評価 | 4年 | | ①経済理論や経済政策に関する知識を活用して、経済社会の多様な課題を理解・分析し、その解決策を模索することができる。 ②統計データを活用して、社会的現象を経済学の観点から理解し、分析することができる。 ③世界の経済成長と格差が生み出される背景を捉え、問題解決に導くための論理的な能力を涵養することができる。 ④世界各地の社会経済の歴史・現状をめぐる知識と理解を応用し、現実の社会問題を根源的に考察できる。 | ・外国語を利用して、異文化について幅広く情報を集めることができる。 ・数学や統計学の基礎知識を用いて、基本的な演算やデータに基づいた客観的な分析を行うことができる。 ・読み手や聞き手の立場に立って、自分の意見を論理的・体系的に伝達すると同時に、他者の意見を聞くことができる。 ・物事を論理的に考察することができる。 ・幅広く、深い教養をもとに、様々な現象を考察し、その本質を理解することができる。 | ・経済社会で現実に行き起きている問題に自ら気づき、経済理論の基礎知識をもとに理解しようとする自発的な行動をとることができる。 ・社会の多様な問題に対して、専門分野および周辺領域の知識を活用して積極的に取り組む態度を備えている。 ・文化や言語の異なる人も含めて、他者の多様な考えに共感し、それを尊重する態度を備えている。 ・企業や個人の行動が社会にどのような影響を与えるかを考え、社会的責任を踏まえた行動ができる。 | 2月 | 毎年 | 卒論の指導経験および結果を教員間で情報共有し、今後の指導の改善に資するための知見を深める。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| 間節評価 | 学生調査 | | アンケートなどを適宜用い学生からフィードバックを得て、ディプロマポリシーに掲げられた到達目標全般の自己評価を行う。 | | | | | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 |
| その他 | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | | | ディプロマポリシーに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | 3年毎 | 調査結果をもとに、ディプロマポリシーの到達目標全般、特に汎用的能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。これらの検討は随時開催される経済学プログラム会議の中で行う。 | |

4 経済科学部
(2) 経営学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|----------|---|---|--|--|----------------------|----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | アドバイザー教員による学修状況（単位取得状況・GPA・成績内容）の確認と指導 | 2年 | | | <ul style="list-style-type: none"> 英語および英語以外の外国語について、学士レベルで求められる基本的な活用能力（文章読解・文章作成）を発揮することができる。 他者と、外国語による基本的なコミュニケーション（会話・E-mail等）を行うことができる。 読み手や聞き手の立場に立って、自分の意見を論理的、体系的に伝達することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 文化や言語の異なる人も含めて、他者の様々な考えに共感し、尊重しながら、目標に向けて協力する態度を備えている。 社会の多様な問題に対して、専門的な見地から積極的に取り組み、確実に行動に移すことができる。 社会の現状から、目的や課題を発見し、その課題の解決に向けた方法を計画し、取り組む態度を備えている。 | 4月・10月 | 毎年 | 教員間で情報共有し、学生のより適切な履修と学修が実現されるよう、知見を深める。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |
| | 主としてプログラム基礎科目（経営学概論Ⅰ・経営学概論Ⅱ・会計学概論Ⅰ・会計学概論Ⅱ）の単位取得状況と成績内容に加えて、中核科目（経営組織論Ⅰ・人的資源管理論Ⅰ・経営戦略論Ⅰ・マーケティング論Ⅰ・財務会計論Ⅰ・財務会計論Ⅱ・管理会計論Ⅰ・租税理論Ⅰ）の履修状況・単位取得状況および成績内容 | 2年 | <ul style="list-style-type: none"> 企業の経営管理の諸問題を考え、必要となる経営学の基礎知識を修得している。 | <ul style="list-style-type: none"> ①経営学に関する知識の修得により、企業組織の設計・運営にかかわる諸問題、および市場や競争相手といった外部環境と対峙する際にとり得る手法の成果を分析できる。 ②会計学・税法に関する専門知識を修得し、会計業務に関する基本的な実務を行うために必要な知識とスキルを身に付けることで、企業行動や企業の経営状態、また企業に必要な会計情報システムを分析することができる。 | | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じて到達目標の見直しを行う。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |
| | 主指導教員による学修状況（単位取得状況および成績内容）の確認と指導 | 3年 4年 | | <ul style="list-style-type: none"> ①経営学に関する知識の修得により、企業組織の設計・運営にかかわる諸問題、および市場や競争相手といった外部環境と対峙する際にとり得る手法の成果を分析できる。 ②会計学・税法に関する専門知識を修得し、会計業務に関する基本的な実務を行うために必要な知識とスキルを身に付けることで、企業行動や企業の経営状態、また企業に必要な会計情報システムを分析することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 数学や統計学等、自然科学分野に関する基礎知識をもとに、基本的なモデルやデータによる客観的な分析を行うことができる。 政府・政府関係機関等が公表する経済データや企業等で作成される経営・会計データの意味を理解し、それらデータを活用し、適切な分析を行うことができる。 分析対象を論理的に考察できる。 社会科学的観点から、経済的事象を考察し、その本質を理解することができる。 幅広く、深い教養をもとに、さまざまな社会的事象を考察し、その本質を理解することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 社会の多様な問題に対して、専門的な見地から積極的に取り組み、確実に行動に移すことができる。 社会の現状から、目的や課題を発見し、その課題の解決に向けた方法を計画し、取り組む態度を備えている。 | 4月・10月 | 毎年 | 教員間で情報共有し、学生のより適切な履修と学修が実現されるよう、知見を深める。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |
| | プログラム中核科目（経営組織論Ⅰ・人的資源管理論Ⅰ・経営戦略論Ⅰ・マーケティング論Ⅰ・財務会計論Ⅰ・財務会計論Ⅱ・管理会計論Ⅰ・租税理論Ⅰ）の単位取得状況・成績内容を中心とし、その他専門科目（検定商業簿記2級Ⅱ・検定工業簿記2級・租税理論Ⅱ・原価計算論・管理会計論Ⅱ・会計情報論・国際会計論・経営税務論Ⅱ・人的資源管理論Ⅱ・経営戦略論Ⅱ・中小企業論・マーケティング論Ⅱ・経営情報論・社会科学方法論）の履修状況・単位取得状況・成績内容 | 3年 | <ul style="list-style-type: none"> 企業の経営管理の諸問題を考え、必要となる経営学の基礎知識を修得している。 企業活動を計数面から把握するために必要不可欠な簿記、財務会計、管理会計及び税法に関する基礎知識を修得している。 | <ul style="list-style-type: none"> ①経営学に関する知識の修得により、企業組織の設計・運営にかかわる諸問題、および市場や競争相手といった外部環境と対峙する際にとり得る手法の成果を分析できる。 ②会計学・税法に関する専門知識を修得し、会計業務に関する基本的な実務を行うために必要な知識とスキルを身に付けることで、企業行動や企業の経営状態、また企業に必要な会計情報システムを分析することができる。 | | | 原則3月（連続の時期によって9月に実施） | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じて到達目標の見直しを行う。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |
| | 卒業論文及び卒論報告会の評価 | 4年 | | <ul style="list-style-type: none"> ③修得した専門知識と理論を活用して、現実の社会問題の解決に取り組むことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 数学や統計学等、自然科学分野に関する基礎知識をもとに、基本的なモデルやデータによる客観的な分析を行うことができる。 政府・政府関係機関等が公表する経済データや企業等で作成される経営・会計データの意味を理解し、それらデータを活用し、適切な分析を行うことができる。 分析対象を論理的に考察できる。 社会科学的観点から、経済的事象を考察し、その本質を理解することができる。 幅広く、深い教養をもとに、さまざまな社会的事象を考察し、その本質を理解することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 社会の多様な問題に対して、専門的な見地から積極的に取り組み、確実に行動に移すことができる。 社会の現状から、目的や課題を発見し、その課題の解決に向けた方法を計画し、取り組む態度を備えている。 | 2月 | 毎年 | 卒論の指導経験および結果を教員間で情報共有し、今後の指導の改善に資するための知見を深める。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |
| 間接評価 | 学生調査 | | アンケートなどを適宜用い学生からフィードバックを得て、ディプロマポリシーに掲げられた到達目標全般の自己評価を行う。 | | | | | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。これらの検討は、毎月開催される定例の経営学プログラム会議の中で行う。 |

4 経済科学部
(3) 学際日本学プログラム 【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|----------|--|--|--|---|---------|----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 学修デザイン演習Iの単位取得・成績分布 | 2年 | ・日本学・日本研究の成立の経緯と現状について、基礎的な知識と理解を有している。 | | ・自ら課題を設定し、探究に取り組むことができる。 ・課題解決のために他者と協働することができる。 | ・変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 ・自身と異なる考え方、背景をもつ人を尊重する態度を備えている。 | 9月 | 毎年 | 科目担当者と学位プログラム評価担当者が協力してとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、授業内容の改善をおこなう。 |
| | 学修デザイン演習II（基礎モジュール修了試験の実施を含む）の単位取得・成績分布 | 2年 | ・日本の社会と文化が抱えている今日的な問題とその歴史的背景について、基礎的な知識と理解を有している。 ・日本の社会と文化を理解するための環東アジア的な文脈について、基礎的な知識と理解を有している。 ・人文・社会科学諸分野における日本研究について、基礎的な知識と理解を有している。 ・日本学・日本研究の成立の経緯と現状について、基礎的な知識と理解を有している。 | | ・英語その他の外国語を、問題探究、議論、発表のために使うことができる。 | | 3月 | 毎年 | 科目担当者と学位プログラム評価担当者が協力してとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、授業内容の改善をおこなう。 |
| | 外国語文献講読I・IIおよびIntroduction to Japanese Studiesの単位取得状況・成績分布 | 2年 | | ・日本の社会と文化における様々な問題をグローバルとローカルの両方の観点からとらえることができる。 | ・英語その他の外国語を、問題探究、議論、発表のために使うことができる。 | | 3月 | 毎年 | 科目担当者と学位プログラム評価担当者が協力してとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、授業内容の改善をおこなう。 |
| | アカデミック・ライティングの単位取得状況・成績分布 | 2年 | | | ・自ら課題を設定し、探究に取り組むことができる。 | 変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 | 9月 | 毎年 | 科目担当者と学位プログラム評価担当者が協力してとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、授業内容の改善をおこなう。 |
| | 中核モジュールの単位取得・成績分布 | 3年 | ・日本学・日本研究の成立の経緯と現状について、基礎的な知識と理解を有している。 | ・日本の社会と文化における様々な問題を歴史的な観点からとらえることができる。 ・日本の社会と文化における様々な問題をグローバルとローカルの両方の観点からとらえることができる。 ・人文・社会科学のいくつかのディシプリンにおける基礎的な分析手法を使うことができる。 ・日本学・日本研究の現状の問題点をふまえたうえで、自らの課題を設定することができる。 | ・自ら課題を設定し、探究に取り組むことができる。 ・英語その他の外国語を、問題探究、議論、発表のために使うことができる。 | 変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 | 3月 | 毎年 | 学位プログラム評価担当者がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、ディプロマポリシーの点検・見直しをおこなう。 |
| | 他プログラムの基礎モジュールの単位取得状況・成績分布 | 2年 | | ・人文・社会科学のいくつかのディシプリンにおける基礎的な分析手法を使うことができる。 | ・自ら課題を設定し、探究に取り組むことができる。 | ・変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 | 3月 | 毎年 | 学位プログラム評価担当者がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、授業内容の改善をおこなう。 |
| | 実習・演習科目における共通のパフォーマンス評価 | 3年 4年 | | | ・東アジアと日本が抱える問題について、正確な基礎知識をもとに議論することができる。 ・課題解決のために他者と協働することができる。 | ・変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 ・自身と異なる考え方、背景をもつ人を尊重する態度を備えている。 | 2～3月 | 毎年 | 学位プログラム評価担当者がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーの点検・見直しをおこなう。 |
| | ルーブリックを用いた集大成科目（卒業論文）の評価 | 4年 | | ・人文・社会科学のいくつかのディシプリンにおける基礎的な分析手法を使うことができる。 ・日本学・日本研究の現状の問題点をふまえたうえで、自らの課題を設定することができる。 | ・自ら課題を設定し、探究に取り組むことができる。 ・英語その他の外国語を、問題探究、議論、発表のために使うことができる。 ・東アジアと日本が抱える問題について、正確な基礎知識をもとに議論することができる。 | ・変化しつづける現代社会の諸問題に旺盛で多面的な関心を持ちつづける態度を備えている。 ・自身と異なる考え方、背景をもつ人を尊重する態度を備えている。 | 2～3月 | 毎年 | 卒業論文の成績会議において検討するとともに、学位プログラム評価担当者が結果をまとめ、プログラム担当教員間で共有し、ルーブリックの改善を検討する。 |
| 間接評価 | カリキュラムに関するアンケート調査の実施（4年次生対象） | 4年 | | ディプロマ・ポリシーに掲げられた到達目標全般の自己評価（「態度・姿勢」における「生涯にわたり、自身を省察しながら自律的に学習しつづける態度を備えている」を含む） | | | 2～3月 | 毎年 | 学位プログラム評価担当者がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有し、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーの点検・見直しをおこなう。 |
| | ダブルディグリー（DDP）留学生に対するアンケート調査の実施 | 3年 4年 | | | ・課題解決のために他者と協働することができる。 | ・生涯にわたり、自身を省察しながら自律的に学習しつづける態度を備えている。 ・自身と異なる考え方、背景をもつ人を尊重する態度を備えている。 | 8月、2月 | 毎年 | DDP担当教員がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有する。 |
| | 留学生チューターに対するアンケート調査の実施 | 2年～4年 | | | ・課題解決のために他者と協働することができる。 | ・生涯にわたり、自身を省察しながら自律的に学習しつづける態度を備えている。 ・自身と異なる考え方、背景をもつ人を尊重する態度を備えている。 | 8月、2月 | 毎年 | DDP担当教員がとりまとめ、プログラム会議において担当教員間で共有する。 |

4 経済科学部
(4) 地域リーダープログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------------------|--------------------------------|---|--|---|--|---|---------|---|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 課題解決スキルⅠの単位修得状況・成績分布 | 2年 | ・データを用いた分析に関する基本的な知識を理解、修得している。 ・レポートや論文を書くにあたり必要となる技能を修得している。 | | ・身に付けた表現法を駆使して、他者に対して、自らの考えを的確に表現、発信できる。 | | 9月 | PD (Program Development) 会議において、授業内容・方法の見直し等を行うとともに、必要に応じて関係する到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | 課題解決スキルⅡの単位修得状況・成績分布 | 3年 | | | ・異なる世代、異なる考え方をもつ人々と協働して課題解決に取り組むことができる。 | ・自身と異なる考え方、背景をもつ人々を尊重する態度を備えている。 | | | |
| | ライティングスキルの単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・レポートや論文を書くにあたり必要となる技能を修得している。 | ・レポートや論文を書くために必要な技能を利用して、論理的で説得的なレポートや論文を作成できる。 | ・身に付けた表現法を駆使して、他者に対して、自らの考えを的確に表現、発信できる。 | | | | |
| | 知識・理解科目におけるモジュール修了条件に基づく単位修得状況 | 4年 | ・経済学・経営学を中心とした人文社会科学分野の基礎的な専門知識を体系的に修得している。 ・経済学・経営学の中核的な専門知識を体系的に修得している。 | | | | | | |
| | 外国語における単位修得状況 | 2年 | ・英語を含む外国語を用いて、読む、書く、聞く、話すことができる。 | | | | 3月 | | |
| | 社会調査演習A、Bの単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・経済学を含む人文社会科学分野の文献を正確に理解、解釈できる。 ・レポートや論文を書くにあたり必要となる技能を修得している。 | ・データを用いた分析に関する知識を活用して、実際に分析できる。 | ・問題に対して、適切な情報を収集して分析し、解決に導く方法を見出すことができる。 | | | | |
| | 社会開放演習A、B、Dの単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・経済学を含む人文社会科学分野の専門知識を活用して、社会的課題を見出し、解決方法を模索することができる。 | | ・異なる世代、異なる考え方をもつ人々と協働して課題解決に取り組むことができる。 | ・自身と異なる考え方、背景をもつ人々を尊重する態度を備えている。 ・社会を構成する一個人として、あらゆる活動に能動的に参画する態度を備えている。 | | | |
| 卒業論文及び卒業論文発表会の評価 | 4年 | ・経済学を含む人文社会科学分野の専門知識を活用して、社会的課題を見出し、解決方法を模索することができる。 ・経済学を含む人文社会科学分野の文献を正確に理解、解釈できる。 ・レポートや論文を書くにあたり必要となる技能を修得している。 | ・レポートや論文を書くために必要な技能を利用して、論理的で説得的なレポートや論文を作成できる。 ・データを用いた分析に関する知識を活用して、実際に分析できる。 | ・物事を多面的に見ることができ、かつ論理的に思考することができる。 ・問題に対して、適切な情報を収集して分析し、解決に導く方法を見出すことができる。 ・身に付けた表現法を駆使して、他者に対して、自らの考えを的確に表現、発信できる。 | ・常識や慣習に拘泥することなく、自由に思考することができる。 | | | | |
| 間接評価 | 学部で実施するプログラム満足度調査 | 4年 | ディプロマ・ポリシーに掲げられた到達目標に対する学生による自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | PD (Program Development) 会議において、授業内容・方法の見直し等を行うとともに、必要に応じて関係する到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| その他 | 社会開放演習にて協働した社会人・団体へのインタビュー調査 | - | | | | ・自身と異なる考え方、背景をもつ人々を尊重する態度を備えている。 ・社会を構成する一個人として、あらゆる活動に能動的に参画する態度を備えている。 | 3月 | 毎年 | PD (Program Development) 会議において、授業内容・方法の見直し等を行うとともに、必要に応じて関係する到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 卒業生に対するインタビュー調査 | 卒業生 | ディプロマ・ポリシーに掲げられた到達目標 | | | | | | |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生(卒業後3年以内) | | | | ディプロマ・ポリシーに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | 3年毎 | 調査結果をもとに、PD (Program Development) 会議において、ディプロマ・ポリシーの到達目標および科目構成の見直しを行う。 |

5 理学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて教育推進委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

5 理学部
 (1) 数学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|----------------|------|--|--|--|---|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 数学講究の評価 | 4年 | <p>・数学全般の基礎的な定義や定理、及び解析学、代数学・幾何学、統計学・応用数学いずれかの分野に関する専門的な知識を理解する。</p> | <p>・各専門分野（解析学、代数学、幾何学、統計学、応用数学）の基本的な定義および定理を理解し、説明ができる。</p> <p>・数式を解析的または数量的に処理でき、それを論理的に説明することができた。また、数、図形などのもつ特性を的確に表現できる。</p> | <p>・数学で培われた論理的思考能力を基に、多様な問題を論理的に分析・整理し、解決策を提案できる。</p> <p>・現代社会で生じる様々な問題の本質を捉え、抽象化し、モデル化することができる。</p> <p>・理学の素養と専門的スキルを基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。</p> | <p>・様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ。</p> | 2月 | 毎年 | <p>数名の教員でプログラム配属学生全員分の評価結果を到達目標ごとに分析し、教育課程の見直しを検討し、プログラム内でFDを実施する。</p> <p>さらに、理学部全体のFDで、本プログラムの教育課程の見直し結果を報告し、意見交換を行う。全員分の評価結果を保存する。</p> |
| 間接評価 | プログラム到達目標達成度調査 | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | <p>授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを数学プログラムFDで行う。</p> |
| その他 | 卒業生、雇用先等に対する調査 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 3年毎 | <p>調査結果をもとに、DPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを数学プログラムFDで行う。</p> |

5 理学部
(2) 物理学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 | |
|------|--|------|--|---|---|---|--|------|---|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | | |
| 直接評価 | プログラムへの配属判定基準に記載の科目（※）の単位修得状況 ※大学学習法（スタディスキルズ）、物理学基礎実習 a、物理学基礎実習 b、教養教育に関する科目、自然系共通専門基礎科目等 | 2年 | ①古典物理学の基本法則を学び、自然界の現象が基本法則から説明されることを理解する。 ②現代社会における物理学及び物理学的思考能力の必要性について理解する。 ③自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。 ④グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める。 | ⑥物理学の基本的な定義および法則を理解し、その物理法則を適用するために論理的に思考できる。 ⑦物理学の基本的な問題を数学的な形に記述し、モデル化できることを理解できる。 ⑧実験や観測を行い、結果をまとめることができる。 | ⑩物理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 | ⑫科学的根拠に基づき、論理的に意思決定を行う態度を持つ。 ⑬社会や自然界の多様な問題に対して、専門の見地から主体的に取り組む態度を持つ。 ⑭様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ。 | 9月 | 毎年 | 配属者の単位取得状況を確認し、プログラム内で共有する。学生相談員の指導に活用する。必要に応じて物理P教育問題検討委員会にて検討する。 | |
| | 3年生への進級判定基準に記載の科目（※）の単位修得状況 ※物理学基礎 A I、A II、基礎物理学演習 A、B、基礎物理数学、解析力学、電磁気学 I、II、物理学演習 A、B、C、D、振動論と微分方程式、複素解析、波動とフーリエ解析、熱力学 A、B等 | 2年 | 同上 | ⑥物理学の基本的な定義および法則を理解し、その物理法則を適用するために論理的に思考できる。 ⑦物理学の基本的な問題を数学的な形に記述し、モデル化できることを理解できる。 | | | 3月 | 毎年 | 進級状況、原級者の取得状況を確認し、プログラム内で共有する。学生相談員の指導に活用する。授業内容・方法につなげるとともに、必要に応じて物理P教育問題検討委員会にて到達目標に対応する科目達成見直しを行う。 | |
| | 4年生への進級判定基準に記載の科目（※）の単位修得状況 ※量子力学IA、IB、IIA、IIB、統計力学IA、IB、IIA、IIB、物理学実験 A、B、C、D等 | 3年 | | ①物理学の基本法則を学び、自然界の現象が基本法則から説明されることを理解する。 ②現代社会における物理学及び物理学的思考能力の必要性について理解する。 ③自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。 | ⑥物理学の基本的な定義および法則を理解し、その物理法則を適用するために論理的に思考できる。 ⑦物理学の基本的な問題を数学的な形に記述し、モデル化できることを理解できる。 ⑧実験や観測を行い、結果をまとめることができる。 | ⑩必要な情報を収集し、それらの情報の中から本質的な問題を探求できる。 ⑪物理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 | ⑭様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ。 | 3月 | 毎年 | 進級状況、原級者の取得状況を確認し、プログラム内で共有する。指導教員の指導に活用する。授業内容・方法につなげるとともに、必要に応じて物理P教育問題検討委員会にて到達目標に対応する科目達成見直しを行う。 |
| | 卒業判定基準に記載の科目（※）の単位修得状況 ※課題研究I、II等 | 2年 | | ①物理学の基本法則を学び、自然界の現象が基本法則から説明されることを理解する。 ②現代社会における物理学及び物理学的思考能力の必要性について理解する。 ③自然科学の複数分野の基礎知識を理解する。 | ⑥物理学の基本的な定義および法則を理解し、その物理法則を適用するために論理的に思考できる。 ⑦物理学の基本的な問題を数学的な形に記述し、モデル化できることを理解できる。 ⑧実験や観測を行い、結果をまとめることができる。 | | | | 毎年 | 卒業判定状況を確認し、プログラム内で共有する。授業内容・方法につなげるとともに、必要に応じて物理P教育問題検討委員会にて到達目標に対応する科目達成見直しを行う。 |
| | 課題研究ルーブリック | 4年 | | | ⑨論理的思考能力を基に、自然界の現象の本質を捉え、モデル化に取り組むことができる。 ⑩必要な情報を収集し、それらの情報の中から本質的な問題を探求できる。 ⑪物理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 | ⑭様々な見地の人々と積極的に意見交換を行い、協働で課題解決に取り組む態度を持つ。 | 9月、3月 | 毎年 | 物理P教育問題検討委員会で検討 | |
| 間接評価 | 二年生配属時アンケート | 2年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 9月 | 毎年 | 調査結果についてプログラム内FDを実施する。さらに、理学部全体のFDで、本プログラムの検討結果を報告し、意見交換を行う。 | |
| | 三年生終了時アンケート | 3年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | | |
| | 四年生終了時アンケート | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | | |
| その他 | 卒業生サンプリング | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 1/3年 | 物理P教育問題検討委員会で検討 | |
| | 学生対話集会アンケート | 学部生 | | | | | 6月 | 毎年 | 学生対話集会で討論・意見交換 | |

5 理学部
(3) 化学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|------|--|---|---|---|---------|----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | プログラム配属資格に記載の科目(理学スタディ・スキルズ、理学基礎演習など)の単位修得状況 | 2年 | ・複数の自然科学分野の基本知識をもとに、自然現象を理解できる。 ・社会における化学の役割を論理的に思考できる。 | ・化学の基礎原理や基本法則を用いて、物質が示す性質や現象を、ある程度整理して理解できる。 | | | 9月 | 毎年 | ・各学生に個別指導を行う教員（アドバイザー教員）を割当て、単位取得状況と成績に基づいて、履修/学習の指導を行う。 |
| | 化学プログラム3年進級基準に記載の科目(分析化学I、無機化学I、有機化学I、化学熱力学、基礎量子力学、生体分子化学Iなど)の単位修得状況 | 2年 | ・複数の自然科学分野の基本知識をもとに、自然現象を理解できる。 ・社会における化学の役割を論理的に思考できる。 | ・化学の基礎原理や基本法則を用いて、物質が示す性質や現象を、ある程度整理して理解できる。 ・分析化学/無機化学分野で用いられる実験技術の原理を理解し、器具/装置を操作することができる。 | | | 3月 | 毎年 | ・単位取得状況の分布をプログラム教員で共有し、必要に応じて化学の初修カリキュラムをカリキュラム検討委員会で検討する。 ・単位取得状況と成績に基づいて、アドバイザー教員が担当学生の履修/学習を個別指導する。 |
| | 化学プログラム4年進級基準に記載の科目(分析化学実験、無機化学実験、有機化学実験、物理化学実験、生化学実験など)の単位修得状況 | 3年 | ・複数の自然科学分野の基本知識をもとに、自然現象を理解できる。 ・社会における化学の役割を論理的に思考できる。 | ・化学の基礎原理や基本法則を用いて、物質が示す性質や現象を、ある程度整理して理解できる。 ・生化学/物理化学/有機化学分野で用いられる実験技術の原理を理解し、器具/装置を操作することができる。 | | | 3月 | 毎年 | ・単位取得状況の分布をプログラム教員で共有し、必要に応じて化学のカリキュラムをカリキュラム検討委員会で検討する。 ・単位取得状況と成績に基づいて、アドバイザー教員が担当学生の履修/学習を個別指導する。 |
| | 「課題研究」ルーブリック | 4年 | ・化学の知識を用いて調査/分析し、課題や問題を整理・抽出し、解決策を提案できる。 | ・各専門分野（無機化学/分析化学/物理化学/有機化学/生化学）の基礎原理や基本法則に基づいた客観的/論理的思考ができる。 | ・理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、意見を交わすことができる。 | ・様々な見地をもつ人と積極的に情報交換を行い、共同して課題解決に取り組む態度/姿勢を持つ。 | 9月、3月 | 毎年 | ・授業内容/方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成を化学プログラムFDで見直す。 |
| 間接評価 | プログラム到達目標達成度調査 | 2年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 9月 | 毎年 | ・授業内容/方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成を化学プログラムFDで見直す。 |
| | プログラム到達目標達成度調査 | 3年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 毎年 | ・授業内容/方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成を化学プログラムFDで見直す。 |
| | プログラム到達目標達成度調査 | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 毎年 | ・授業内容/方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成を化学プログラムFDで見直す。 |
| | 課題研究ルーブリック | 4年 | ・化学の知識を用いて調査/分析し、課題や問題を整理・抽出し、解決策を提案できる。 | ・各専門分野（無機化学/分析化学/物理化学/有機化学/生化学）の基礎原理や基本法則に基づいた客観的/論理的思考ができる。 | ・理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、意見を交わすことができる。 | ・様々な見地をもつ人と積極的に情報交換を行い、共同して課題解決に取り組む態度/姿勢を持つ。 | 9月、3月 | 毎年 | ・授業内容/方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成を化学プログラムFDで見直す。 |

5 理学部
(4) 生物学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|--------|--|---|---|--|---------|----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 基礎細胞遺伝学、基礎細胞生物学、基礎植物学、基礎生物化学、生物学基礎実習a、生物学基礎実習bの単位修得状況・成績分布 | 2年 | [1] 生命現象の基盤となる生体分子の性質と、細胞内における化学反応を理解する [2] 細胞とは何か、どのようにして機能が維持されるかを理解する | [10] 生物の構造を観察し、記録・説明することができる [11] 生体物質を分離し、その性質を明らかにすることができる | | [19] 身近な生物、全ての命を大事にする態度を持つ [20] 自ら進んで課題に取り組む態度を持つ | 9月 | 毎年 | 到達目標ごとに結果を分析し、教育課程の見直しを検討し、プログラム内でFDを実施する。さらに、理学部全体のFDで、本プログラムの教育課程の見直し結果を報告し、意見交換を行う。 |
| | 植物生理学、動物生理学I、系統動物学、生体情報学I、生体情報学II、発生生物学I、発生生物学II、生物英語、分子生物学、細胞生物学I、生物化学（理）、細胞生物学II、動物生理学II、動物生理学III、生物学実習I、生物学実習II、生物学実習III、生物学実習IV、臨海実習Iの単位修得状況・成績分布 | 3年 | [3] 遺伝子の機能と遺伝のしくみを、遺伝現象を支える生体分子の特徴とともに理解する [4] 個体がどのようにできあがっていくか、生物がどのようにして進化し、多様な生物種ができたかを理解する [5] 動物の体の構造と機能を理解する [6] 植物の体の構造と機能を理解する [7] 生物がどのように環境にตอบสนองしながら恒常性を維持していくかを理解する | [12] 遺伝のしくみと遺伝子の機能を明らかにするとともに、遺伝子組換えの技術を適切に取り扱うことができる [13] 生体内外の環境変化に対して、生物がどのように反応するかを明らかにすることができる | [14] 現前の事象を観察し、問題点やその解決策を見つけ出すことができる [15] データを定量的に取り扱い、その意味を論理的に判断することができる [16] 専門的情報や文献を入手して、読解・活用できる | [22] 目標の達成に向けて計画を立て、他者と協力しながら努力する態度を持つ [23] 日常生活における生命科学の関連知識を理解し、その意義について客観的かつ理性的に判断・議論する態度を持つ | 3月 | 毎年 | |
| | 課題研究の到達目標達成度のルーブリックを用いた教員評価 | 4年 | | [10] 生物の構造を観察し、記録・説明することができる [11] 生体物質を分離し、その性質を明らかにすることができる [12] 遺伝のしくみと遺伝子の機能を明らかにするとともに、遺伝子組換えの技術を適切に取り扱うことができる [13] 生体内外の環境変化に対して、生物がどのように反応するかを明らかにすることができる | [14] 現前の事象を観察し、問題点やその解決策を見つけ出すことができる [15] データを定量的に取り扱い、その意味を論理的に判断することができる [16] 専門的情報や文献を入手して、読解・活用できる [17] 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、自分の意見を整理して文章や図、言葉によって説明できる [18] 他者の意見を聞き、適切に議論することができる | [20] 自ら進んで課題に取り組む態度を持つ [21] 継続的に実験や資料解析を行う態度を持つ | 9月、3月 | 毎年 | |
| 間接評価 | プログラムの到達目標達成度に関するアンケート調査 | 2年 | [1] 生命現象の基盤となる生体分子の性質と、細胞内における化学反応を理解する [2] 細胞とは何か、どのようにして機能が維持されるかを理解する [3] 遺伝子の機能と遺伝のしくみを、遺伝現象を支える生体分子の特徴とともに理解する | | | [19] 身近な生物、全ての命を大事にする態度を持つ [20] 自ら進んで課題に取り組む態度を持つ | 9月 | 毎年 | 到達目標ごとに調査結果を分析し、教育課程の見直しを検討し、プログラム内でFDを実施する。さらに、理学部全体のFDで、本プログラムの教育課程の見直し結果を報告し、意見交換を行う。 |
| | プログラム到達目標達成度に関するアンケート調査 | 3年 | [4] 個体がどのようにできあがっていくか、生物がどのようにして進化し、多様な生物種ができたかを理解する [5] 動物の体の構造と機能を理解する [6] 植物の体の構造と機能を理解する [7] 生物がどのように環境にตอบสนองしながら恒常性を維持していくかを理解する | | | [22] 目標の達成に向けて計画を立て、他者と協力しながら努力する態度を持つ [23] 日常生活における生命科学の関連知識を理解し、その意義について客観的かつ理性的に判断・議論する態度を持つ | 3月 | 毎年 | |
| | 課題研究の到達目標達成度のルーブリックを用いた自己評価 | 4年 | | [10] 生物の構造を観察し、記録・説明することができる [11] 生体物質を分離し、その性質を明らかにすることができる [12] 遺伝のしくみと遺伝子の機能を明らかにするとともに、遺伝子組換えの技術を適切に取り扱うことができる [13] 生体内外の環境変化に対して、生物がどのように反応するかを明らかにすることができる | [14] 現前の事象を観察し、問題点やその解決策を見つけ出すことができる [15] データを定量的に取り扱い、その意味を論理的に判断することができる [16] 専門的情報や文献を入手して、読解・活用できる [17] 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、自分の意見を整理して文章や図、言葉によって説明できる [18] 他者の意見を聞き、適切に議論することができる | [20] 自ら進んで課題に取り組む態度を持つ [21] 継続的に実験や資料解析を行う態度を持つ | 9月、3月 | 毎年 | |
| その他 | アンケートおよび大学院指導教員との意見交換 | 大学院進学者 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 毎年 | 調査結果の分析を生物学プログラムFD（3月）で行い、必要であれば科目内容・構成の見直しを行う。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 学部卒業生 | DPに掲げられた到達目標の評価 | | | | | 毎年 | |
| | 教員免許取得者数、学芸員資格取得者数 | 卒業生 | | | | | | 毎年 | |

5 理学部
(5) 地質科学プログラム 【実施計画】

| 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 | |
|---------|---------------------|------------------------|--|---|--|--|------------|-----------|---|
| | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | | |
| 直接評価 | 課題研究（卒業論文） 学習達成度 | 4年 | <p>1) 研究目的の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なにが学問的問題点かを的確に認識している。 ・到達可能な目的になっているか認識している。 | <p>3) データ集め（野外調査、分析など）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画に沿った作業を自主的・継続的に実行をした。 ・想定した手法を誤解・間違いなく履行した。 ・想定外の問題に対し創造性・デザイン能力を発揮して対処できた。 <p>4) 総合解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合性に留意したまとめ作業を行った。 ・適切なモデルを適用してデータを的確に解釈した。 ・想定外の問題に対し創造性・デザイン能力を発揮して対処できた。 | <p>3) データ集め（野外調査、分析など）</p> <p>4) 総合解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク、公衆・環境・倫理に関わる活動があった。 5) プレゼンテーション（口頭） ・全体として説明は聞きやすく、わかりやすかった。 ・質疑での外れでない応答をした。 ・態度は落ち着いていて安定感があった。 <p>6) プレゼンテーション（論文）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体として成果を説得力をもって示した。 ・全体として整然とした仕上がりになっていた。 | <p>2) 研究手法・計画の樹立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主的に立案・デザイン・構想力を発揮して短期的・中期的・長期的研究計画をたてている。 ・研究目的に即した具体性のある目標を設定している。 ・その目標にみあった方法を選択している。 ・実行可能な方法・作業量になっている。 | 1・2 学期末 | 半年毎 | <ul style="list-style-type: none"> ・1・2学期末に直接評価の結果を指導学生に開示し、同時に中間・最終指導を行う。 ・プログラムFDで直接評価の結果について意見交換を行い、必要に応じて、目標となる学修成果を評価する方法・指標等の見直しを行う。 |
| 間接評価 | 課題研究（卒業論文） 学習達成度 | 4年 | <p>1) 研究目的の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なにが学問的問題点かを的確に認識している。 ・到達可能な目的になっているか認識している。 | <p>3) データ集め（野外調査、分析など）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画に沿った作業を自主的・継続的に実行をした。 ・想定した手法を誤解・間違いなく履行した。 ・想定外の問題に対し創造性・デザイン能力を発揮して対処できた。 <p>4) 総合解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合性に留意したまとめ作業を行った。 ・適切なモデルを適用してデータを的確に解釈した。 ・想定外の問題に対し創造性・デザイン能力を発揮して対処できた。 | <p>3) データ集め（野外調査、分析など）</p> <p>4) 総合解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク、公衆・環境・倫理に関わる活動があった。 5) プレゼンテーション（口頭） ・全体として説明は聞きやすく、わかりやすかった。 ・質疑での外れでない応答をした。 ・態度は落ち着いていて安定感があった。 <p>6) プレゼンテーション（論文）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体として成果を説得力をもって示した。 ・全体として整然とした仕上がりになっていた。 | <p>2) 研究手法・計画の樹立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主的に立案・デザイン・構想力を発揮して短期的・中期的・長期的研究計画をたてている。 ・研究目的に即した具体性のある目標を設定している。 ・その目標にみあった方法を選択している。 ・実行可能な方法・作業量になっている。 | 1・2 学期末 | 半年毎 | <ul style="list-style-type: none"> ・1・2学期末に間接評価の結果を指導教員に提出し、同時に中間・最終指導を受ける。 ・プログラムFDで間接評価の結果について意見交換を行い、必要に応じて、目標となる学修成果を評価する方法・指標等の見直しを行う。 |
| | 学生・教員の意見交換会 | | DPに揚げられた教育目標全般の自己評価 | | | | 2月 | 毎年 | 指摘された点を地質科学プログラムFD（3月）で検討、改善に活かす。 |
| その他 | 卒業生と在校生の集い | | DPに揚げられた教育目標全般 | | | | 10月 | 毎年 | 指摘された点を地質科学プログラムFD（3月）で検討し、改善に活かす。 |

5 理学部
(6) 自然環境科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|----------|--|--|---|--|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | プログラム配属時の基礎科目の単位修得状況・成績の分布 (Gコード科目、自然系共通専門基礎科目、理学基礎演習、理学部基礎実習科目、理学部共通ベーシック科目、理学部共通コア科目) | 2年 | 人文社会科学および語学の幅広い一般教養の基礎的な知識、および数学、物理学、化学、生物学、地学などの広範にわたる理学系分野の基礎的な知識を得る。 | | 主体的学習への転換をはかり、必要とする情報を自身で取得し、得た情報や自身の考え方を正確に伝え、表現する能力を育む。 | 理学にとどまらない幅広い知識や考え方に対して積極的にふれようとする姿勢を身につける。 | 9月 | 毎年 | |
| | 進級判定時のプログラム所定のコア科目とコア実験科目の単位修得状況・成績の分布 (自然環境科学総論、物質反応化学、物質科学B、無機化学I、分析化学I、環境気象学、基礎量子力学、地球流体力学、地形学、機能形態学、基礎細胞遺伝学、発生生物学II、多様性生物学a、多様性生物学B、多様性生物学c、生態学、自然環境科学実験A1、自然環境科学実験A2、自然環境科学実験B1、自然環境科学実験B2、自然環境科学実験C1、自然環境科学実験C2) | 3年 | 自然現象を理解するために必要な基礎知識と基礎的な解析手法を知る。 | 以下に係る自然現象を理解するために必要な専門的知識を身につけ、それらの解析のために必要な基礎的な実験・調査手法とデータ解析能力を修得する。 ①地球環境に関わる地圏、気圏、水圏の動態、環境中で生じる諸現象 ②環境における物質の挙動・性質やエネルギーなどの循環 ③環境への適応・進化や多様性維持の仕組み | 理学の4分野の実験の基礎や、解析能力を涵養する。 | 特定の分野に偏らず、理学に関する幅広い知識を修得しようとする姿勢を身につける。 | 2月 | 毎年 | |
| | 卒業判定時のプログラム所定の発展科目、実験・演習科目の単位修得状況・成績の分布、および、NBASのリーダーチャートによる修得項目の分布評価 (海洋化学、フィールド惑星科学概論、寒冷地形学、物質科学A、地球環境化学、エネルギー物質科学、環境汚染論、進化生物学a、進化生物学b、適応生物学、古環境学、環境経済システム論I、環境政策論a、環境政策論b、自然環境科学特論A、自然環境科学特論B、自然環境科学特論C、自然環境科学特論D、自然環境科学研究演習、環境生物学演習、数理演習、環境生物学野外実習A、環境生物学野外実習B、環境生物学野外実習C、地形フィールド実習、地質フィールド実習) | 4年 | 自然現象を高度に理解するための専門的な知識を身につけ、それらを解析するための手法を理解する。また、複数の専門分野に跨る境界領域の学問や、環境社会学の知識にも触れる。 | 以下に係る自然現象をより高度に理解するための知識や、複数の専門分野に跨る境界領域の学問、環境社会学の知識を身につける。 ①地球環境に関わる地圏、気圏、水圏の動態、環境中で生じる諸現象 ②環境における物質の挙動・性質やエネルギーなどの循環 ③環境への適応・進化や多様性維持の仕組み | 問題解決のために必要となる専門的な実験手法や、解析能力を習得する。 | 複数の専門分野に跨る境界領域の学問に触れ、自ら学び、自ら思考する能力を身につける。 | 2月 | 毎年 | プログラム内FDを実施し、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 課題研究におけるルーブリック (課題研究(自然環境)A、課題研究(自然環境)B、課題研究(自然環境)C) | 4年 | | 以下のいずれかに関する課題に対して、さらに専門的な知識と解析能力を身につける。 ①地球環境に関わる地圏、気圏、水圏の動態、環境中で生じる諸現象 ②環境における物質の挙動・性質やエネルギーなどの循環 ③環境への適応・進化や多様性維持の仕組み | | 課題に自ら積極的に取り組み、幅広く思考することで、応用力と問題解決能力を身につける。 | 2月 | 毎年 | |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 (対話集会時のアンケート) | 2年、3年、4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 12月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを自然環境科学プログラムFDで行う。 |
| その他 | 卒業生、雇用先等に対する調査 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを自然環境科学プログラムFDで行う。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | | | | | | | | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 |

5 理学部
(7) フィールド科学人材育成プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|--|---|--|---|----------|--|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | プログラム所定のコア科目の単位取得状況・成績分布（フィールド安全論、野生植物生態学、野生動物生態学、流域環境GIS、生態学、環境砂防学、地形学、系統動物学、分析化学Ⅰ） | 2年 | | | | | | | |
| | プログラム所定の専門科目の単位取得状況・成績分布（環境経済システム論Ⅰ、環境政策論a、環境政策論b、環境物理学、海洋化学、水圏生態学、寒冷地形学、地球環境化学、古環境学、進化生物学b、フィールド惑星科学概論、多様性生物学a、多様性生物学c、環境地質学、水文地質学、森林環境論、森林再生学、森林保護学、環境リモートセンシング、測量学（農）、流域水文学、水環境工学、土壌工学、構造デザイン工学、環境統計学、生態遺伝学、温暖化メカニズム・影響学、斜面災害論、雪氷防災学、里地里山再生学、希少生物保全学、フォレスト入門、材木育種学、河川工学、フィールドワーカーのためのリスクマネージメント実習、科学英語演習、臨海実習Ⅰ、地形解析実習、気象解析実習、地形フィールド実習、地質フィールド実習、環境生物学野外実習A、野生植物生態学実習、野生動物生態学実習、測量学実習（農）、GIS・リモートセンシング演習、防災系演習及び実習、生態系管理演習及び実習、フィールド科学インターンシップ、自然再生学実習、災害・復興科学演習及び実習、公開森林実習、持続可能な森林管理演習及び実習） | 3年 | ① 幅広く、豊かな教養をもつ。 ② 自然科学の複数分野の基礎を理解する。 ③ フィールド科学の学修に有用な基礎的内容について理解する。 ④ フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。 ⑤ 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容から総合的に理解でき、説明できる。 ⑥ 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 ⑦ 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 ⑧ 関連分野の基本的な知識を修得し、論理的に思考することができる。 ⑨ グローバル世界における経済、社会、文化について理解を深める。 | ⑩ 基礎的な実習方法を理解し、作業を正確に行える。 ⑪ データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導ける。 ⑫ フィールド科学分野の実習を通して、野外調査に不可欠な危機管理能力を身につける。 ⑬ 演習・実習科目を通して、現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身につける。 ⑭ フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決を導くことができる。 ⑮ フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観をもつ。 ⑯ 研究テーマの背景や位置付けを理解した上で当該分野の課題を見出すことができる。 | ⑰ 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力をもつ。 ⑱ 理学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 ⑲ 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | ⑳ 学問分野区分に制約されることなく、広い視野に立って科学的に物事を理解する姿勢を持つ。 ㉑ 知識を得るだけでなく、実際にさまざまな課題を体験し、理解する姿勢を持つ。 ㉒ グループの課題やゼミ、グループ運営などに取り組む中で、積極性と協調性を持つ。 ㉓ プレゼンテーション能力を身につけ、自分の考えについて他人と議論することができる。 ㉔ 主体的かつ根気強く研究活動に取り組むことができる。 | 3月 | 毎年 | 到達目標ごとに結果を分析し、教育課程の見直しを検討し、プログラム内FDを実施する。 |
| | 卒業研究におけるルーブリック（卒業論文） | 4年 | ⑭ フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決を導くことができる。 ⑯ 研究テーマの背景や位置付けを理解した上で当該分野の課題を見出すことができる。 | ⑰ 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力をもつ。 ⑱ 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | ⑳ プレゼンテーション能力を身につけ、自分の考えについて他人と議論することができる。 ㉑ 主体的かつ根気強く研究活動に取り組むことができる。 | 3月 | 毎年 | 4年次1年間を通して行う卒業研究において、10月の中間発表と2月の卒業発表時にルーブリックを用いて学生のプログラム到達目標の達成度を評価する。数名教員でプログラム所属学生全員分の評価結果を到達目標ごとに分析し、教育課程の見直しを検討し、プログラム内FDを実施する。 | |
| 間接評価 | 教育カリキュラム満足度調査（アンケート、ヒアリング、個人面談、アセスメントシート、対話集会等） | 2～4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 4、10、12月 | 毎年 | 教育カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に応じて到達目標に対応する科目構成の見直しをプログラム内FDで行う。 |
| その他 | 卒業生、雇用先等に対する調査 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム内FDで行う。 |
| | 教員免許取得者数、学芸員資格取得者数、GIS学術士取得者数 | | | | | | | 毎年 | |

6 医学部 医学科

| | | |
|------|--------------|--|
| 基本方針 | 実施目的 | 医学教育プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、医学科カリキュラム評価委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

6 医学部医学科
医学教育プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|-------|------------------------|---|--|--|---------|----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 早期体験実習における評価 | 1年 | | | 患者・家族及び医療従事者間で適切なコミュニケーションをとることができる。 | 医療現場で積極的に実習を行うことができる | | 毎年 | 本人にフィードバックし、今後の学習態度につなげる |
| | 医学入門におけるレポート評価 | 1年 | | | 同級生とグループワークが実施できる | 生涯にわたり自己研鑽を続ける姿勢を磨く | | 毎年 | レポートについての評価をフィードバックし、今後の学習態度につなげる |
| | 基礎医学における総括試験 | 2年、3年 | 基礎医学についての知識を有している | | | | 科目により適宜 | 毎年 | 進級判定に活用 |
| | 研究室実習 | 3年 | 基礎医学についての知識を応用できる | | 基礎研究、臨床研究に興味をもち、自ら問題を発見し、論理的思考で問題解決を図ることができる | 生涯にわたり自己研鑽を続ける姿勢を磨く | 9月～10月 | 毎年 | ポスター発表により研究成果を発表し、同級生、指導教員からフィードバックを受け、今後の研究活動につなげる |
| | 臨床医学、社会医学における総括試験 | 3年、4年 | 臨床医学、社会医学についての知識を有している | 保健、医療、福祉に関する制度や業務を理解している 国際保健に関心を寄せ、情報収集し、課題解決に取り組める | | | 科目により適宜 | 毎年 | 進級判定に活用 |
| | 英語医療面接実習 | 4年 | 臨床医学についての基礎知識を有している | 基本的な診療を英語で実施できる | 英語を用いて患者と基本的なコミュニケーションをとることができる | 患者・利用者の価値観や背景を理解し、個性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を持ち、礼節ある態度を備えている。 | 12月 | 毎年 | 本人にフィードバックし、今後の学習につなげる |
| | 共用試験診療参加型臨床実習後OSCE：外部評価者を導入して、臨床実習後の診療の実践能力を総合的に評価する。 | 6年 | 医学に関する知識を有し実践に活用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下で実践できる。 | 患者・家族及び医療従事者間で適切なコミュニケーションをとることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を理解し、個性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を備えている。 | 9月 | 毎年 | 卒業についての総合的評価として活用する。カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。臨床実習教育WG、臨床実習後OSCEWG、カリキュラム委員会等において検討する。 |
| | eポートフォリオ評価：診療参加型臨床実習で、卒業時に獲得すべきコンピテンス・コンピテンシーの達成や経験すべき症候を、長期に時間軸に沿って継続的に直接、評価する。実習のログを残すことによる自らの学びの省察、学生と教員間の双方向性のフィードバック、教員間の情報共有と連携強化が可能である。 | 4年～6年 | 医学に関する知識を有し実践に活用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下で実践できる。 国際的な視野をもちつつ地域の実情にあった医療を実践できる | 患者・家族及び医療従事者間で適切なコミュニケーションをとることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を理解し、個性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を持ち、礼節ある態度を備えている。 | 通年 | 毎年 | 必要に応じて本人への形成的評価にも使用される。実習態度については総合的にも評価される。臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。カリキュラム委員会において検討する。 |
| | mini-CEX：診療参加型臨床実習で、学生と患者とのやり取りを教員が観察し、医療面接、身体診察、プロフェッショナリズムなどの観点から評価する。 | 4年～6年 | 医学に関する知識を有し実践に活用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下で実践できる。 | 患者・家族及び医療従事者間で適切なコミュニケーションをとることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を理解し、個性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を持ち、礼節ある態度を備えている。 | 通年 | 毎年 | 必要に応じて本人への形成的評価にも使用される。臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。カリキュラム委員会において検討する。 |
| | DOPS：診療参加型臨床実習で、手技を評価する。 | 4年～6年 | 医学に関する知識を有し実践に活用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下で実践できる。 | | 患者・利用者の価値観や背景を理解し、個性を尊重できる。プロフェッショナルにふさわしい倫理観を持ち、礼節ある態度を備えている。 | 通年 | 毎年 | 臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。カリキュラム委員会において検討する。 |

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|--------------------|--------------------------------|---------------------------|--|---|---------|----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | Case-based Discussion：症例検討会などの場面で問題解決能力を評価する。 | 4年～6年 | 医学に関する知識を有し実践に 応用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下 で実践できる。 | 患者・家族及び医療従事者間で 適切なコミュニケーションをと ることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を 理解し、個別性を尊重できる。 プロフェッショナルにふさわし い倫理観を持ち、礼節ある態度 を備えている。 自己研鑽を続ける姿勢を備えて いる | 通年 | 毎年 | 必要に応じて本人への形式的評価にも使用される。 臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じ て係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う カリキュラム委員会において検討する。 |
| | 360°評価：多職種により業務姿勢を 評価する。 | 4年～6年 | 医学に関する知識を有し実践に 応用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下 で実践できる。 | 患者・家族及び医療従事者間で 適切なコミュニケーションをと ることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を 理解し、個別性を尊重できる。 プロフェッショナルにふさわし い倫理観を持ち、礼節ある態度 を備えている。 自己研鑽を続ける姿勢を備えて いる | 通年 | 毎年 | 必要に応じて本人への形式的評価にも使用される。 臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じ て係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う 。カリキュラム委員会において検討する。 |
| | 卒業試験 | 6年 | 医学に関する知識を有し実践に 応用できる | | | | 10月 | 毎年 | 卒業に値する知識の有無について総括的に評価す る。 |
| | 公的化共用試験CBT：外部評価者を導 入して、医学・医療に関する知識の修 得状況を総括的に評価する。 | 4年 | 医学に関する知識を有し実践に 応用できる。 | | | | 10月 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。 |
| | 公的化共用試験OSCE：外部評価者を導 入して、臨床実習前の診療の実践能力 を総括的に評価する。 | 4年 | 医学に関する知識を有し実践に 応用できる。 | 基本的な診療を指導医の監督下 で実践できる。 | 患者・家族及び医療従事者間で 適切なコミュニケーションをと ることができる。 | 患者・利用者の価値観や背景を 理解し、個別性を尊重できる。 プロフェッショナルにふさわし い倫理観を持ち、礼節ある態度 を備えている。 | 11月 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。 |
| 間接評価 | 学生アンケート調査：1年に1回、コ ンピテンス・コンピテンシー達成度 に関するアンケート調査を行う。 | 全学年 | デュプロマポリシー（DP）に掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 4月 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。カリキュラム委員会において検討する。 |
| | 学生による教育プログラム評価への参 画：学生（各学年代表者2～3名）がカ リキュラム委員会、カリキュラム評価 委員会へ参加し、教員と教育プログラ ムについての意見交換を行う。 | 全学年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 随時 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。カリキュラム委員会において検討する。 |
| その他 | 卒業生アンケート調査：卒業時および 卒業後、コンピテンス・コンピテン シー達成度、職務内容への満足度に関 するアンケート調査を行う。 | 6年、 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 1月 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。カリキュラム評価委員会において検討する。 |
| | 卒業生に対する雇用者からの評価：卒 業後、雇用者へのアンケート調査を行 う。 | 卒業生 （研修先 病院） | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 未定 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。カリキュラム評価委員会において検討する。 |
| | 医師国家試験合格者数および合格率 （新卒・既卒） | | DPに掲げられた知識・理解の到 達目標 | | | | 3月 | 毎年 | カリキュラムの見直しにつなげるとともに、必要に 応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを 行う。カリキュラム評価委員会において検討する。 |
| | 入学状況、進学・留年・退学の状況、 授業アンケートなどの教学IRデータ | | | | | | 随時 | 毎年 | 医学教育センターにて収集した教学IRデータを分析 し、学生支援につなげることが可能かどうか、検討 し、必要に応じてカリキュラム評価委員会、学務委 員会と情報を共有する。 |

7 医学部保健学科

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて学務委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

7 医学部保健学科
(1) 看護学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 | |
|------|-------------------------------------|--------------------|---|---|---|--|--------------------------------------|-----|---|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | | |
| 直接評価 | スタディスキルズ | 1年 | ⑫ 日本語や英語により、口頭または資料を用いて有効なコミュニケーションを行う ⑮ 国際社会における経済や社会、自然ならびに文化や芸術に関する理解を深める | | ⑩ 自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する ⑬ 時間管理、優先順位づけを行い、定められた期限とルールを守り行動できる | ⑲ 課題に対して主体的、客観的、創造的に取り組む | 8月 | 毎年 | 科目責任者 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。毎年3月に実施される学部FDにおいて検討する。 | |
| | 基礎看護学実習Ⅰの単位履修状況・成績分布 | 1年 | ① 人間の成長や発達、心理や行動、健康に関する基礎科学が理解できる | | ⑫ 日本語や英語により、口頭または資料を用いて有効なコミュニケーションを行う ⑭ 多文化間での活動に不可欠な異文化理解と、翻って自国の文化を客観的に洞察する | ⑳ 傾聴や対話を通して対象と共感的なコミュニケーションを行う | 10月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | 基礎看護学実習Ⅱの単位履修状況・成績分布 | 2年 | ② 看護の基盤となる人体の構造や機能、病態、治療に係わる系統的知識を深める | ⑥ 対象の権利を尊重した上で適切な看護実践ができる ⑦ 科学的根拠に基づく看護計画を立案し、その成果を評価できる | | ⑱ 対象者の権利を尊重し、個人情報を守秘する | | 1月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 新潟地域看護学実習の単位履修状況・成績分布 | 2年 | ③ 保健医療福祉への活動の基盤となる健康科学、看護実践科学、関係法規や倫理的原則が理解できる | | ⑪ チームの目標に沿って構成員の意見や行動を調整・整理し、リーダーシップを発揮する | ⑲ 課題に対して主体的、客観的、創造的に取り組む | 10月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | 各領域別臨床実習の単位履修状況・成績分布 | 3年 | ④ 看護の探求のための研究方法や計画立案・実施評価にかかる一連の過程が理解できる | ⑥ 対象の権利を尊重した上で適切な看護実践ができる ⑦ 科学的根拠に基づく看護計画を立案し、その成果を評価できる | ⑪ 多職種と十分に意思疎通をはかり、連携できる | ⑳ 傾聴や対話を通して対象と共感的なコミュニケーションを行う | 2月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | チーム医療実習・統合実践実習の単位履修状況・成績分布 | 3年 | ④ 看護の探求のための研究方法や計画立案・実施評価にかかる一連の過程が理解できる | ⑦ 科学的根拠に基づく看護計画を立案し、その成果を評価できる ⑧ 医療安全に関する指針等に基づき、医薬品や医療機器が管理できる ⑨ 疾病予防や健康の維持増進の観点から対象（個人・家族・集団）に必要な保健指導ができる | ⑪ 多職種と十分に意思疎通をはかり、連携できる | ⑳ 傾聴や対話を通して対象と共感的なコミュニケーションを行う | 3月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | 看護研究演習Ⅰ・Ⅱ | 4年 | ④ 看護の探求のための研究方法や計画立案・実施評価にかかる一連の過程が理解できる | ⑧ 医療安全に関する指針等に基づき、医薬品や医療機器が管理できる | ⑮ 統計スキルを用いて、情報を収集・加工し、新たな意味を見出す | ⑲ 課題に対して主体的、客観的、創造的に取り組む ㉑ 新しい知識や技術を学び看護を探究し続ける | 1月 | 毎年 | 専攻会議・実習科目責任者ワーキング・実習委員会で、授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| 間接評価 | NBAS 学習目標達成度評価アンケート | 各学年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 1年次 10月 2年次 3月 3年次 3月 | 毎年 | 各学年担任 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | カリキュラム満足度調査 | 4 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 1月 | 毎年 | 看護学専攻分野学務委員会 結果をもとにDPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや科目構成の見直しを行う。 | |
| その他 | 看護技術経験一覧の学生評価 | 3 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2月 | 毎年 | 看護学専攻実習委員会 結果をもとにDPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや科目構成の見直しを行う。 | |
| | 卒業生および雇用・進学先に対するアンケート調査 | 卒業生、 雇用・ 進学先 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 9月 | 3年毎 | 卒業生・雇用先（新潟大学歯学総合病院検査部・県内外主要病院）にアンケート調査を行う。結果をもとに専攻会議で、授業内容と方法の点検を行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |
| | 看護師・保健師・助産師国家試験の合格者数および合格率（その経年的推移） | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 7月 | 毎年 | 出題傾向、難易度、得点分布を検証する。結果をもとに専攻会議・学年担当教員ワーキングで授業内容・方法の点検を行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成・教育方法の見直しを行う。 | |

7 医学部保健学科
(2) 放射線技術科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|-----------------------|---|--|---|---|------------------|--------------------|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 【中間段階】各履修科目の成績評価の集積として示される学修成果を下記科目群で中間評価を実施し、第4年次への進級可否を判定する。 科目：第3年次までに開講される専門基礎科目及び専門教育科目のすべての必修科目 方法：上記履修科目の成績評価 | 編入生を除く3年次学生全員 | 人体の構造と機能及び疾病に関する系統立てた知識を有し理解している。 生命科学・保健・医療に関する幅広い基礎知識を有し理解している。 医療に適用される理工学及び情報科学の基礎知識を有し理解している。 放射線の物理的性質と放射線計測に関する基礎知識を有し理解している。 放射線生物学および放射化学に関する基礎知識を有し理解している。 放射線の取扱いおよび管理に関する基礎知識を有し理解している。 装置・機器の構造・動作原理に関する基礎知識を有し理解している。 医用画像に関する画像工学・情報工学の基礎知識を有し理解している。 医用画像に用いられる検査法の基礎知識を有し理解している。 医用画像に必要な解剖・病態に関する基礎知識を有し理解している。 核医学検査に必要な知識・技術を実践的に活用できる。 放射線治療に必要な知識・技術を実践的に活用している。 | 理工学及び情報科学を医療に活用することができる。 放射線計測を実践できる。 放射線生物学及び放射化学を医療に活用することができる。 放射線の取扱い及び管理を実践できる。 装置・機器の保守管理を実践できる。 画像工学・情報工学を医用画像の解析・評価・処理に活用できる。 医用画像に用いる検査法を実践的に活用できる。 医用画像に必要な解剖・病態に関する知識を実践的に活用できる。 核医学検査に必要な知識・技術を実践的に活用できる。 放射線治療に必要な知識・技術を実践的に活用できる。 | | | 2月 | 毎年 | 専攻会議で授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 【最終段階】焦点を当てる学修成果（上欄①②）に直結する下記の集大成科目で最終評価を実施する。 科目：①放射線科学セミナー ②臨地実習関連科目群 方法：①診療放射線技師国家試験に準じた実力テスト（複数回）等 ②実習病院の臨床教員による客観的評価 | 編入生を除く4年次学生全員 | | | | 新しい知識や技術を学び探究する態度を備えている。 責任感をもって医療を実践する態度を備えている。 医療の向上のための実践への情熱をもっている。 医学・医療技術の進歩に寄与することへの情熱をもっている。 対象者の権利を理解し、尊重する姿勢を備えている。 | 2月 | 毎年 | 専攻会議で授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 卒業研究及び卒業研究発表会の評価 | 4年全員 | | | 論理的に思考できる。 必要な情報を収集できる。 収集した情報を分析できる。 自らの考えを的確に文章表現できる。 口頭または資料を用いて有効なプレゼンテーションができる。 他者との良好なコミュニケーションができる。 自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決できる。 | | 2月 | 毎年 | 専攻会議で授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| 間接評価 | 学生調査 方法：授業評価アンケート ①放射線科学セミナー ②臨地実習関連科目群 | 編入生を除く4年次学生全員 | ディプロマポリシーに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | ①第2学期末 ②第1学期末 | 毎年 | 専攻会議で授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| その他 | 卒業生、雇用先等に対する調査方法 ①アンケート（教育基盤機構実施調査を利用） ②アンケート（直近3年間の採用者の状況調査） | ①卒業生 ②雇用先（臨地実習病院等） | ディプロマポリシーに掲げられた到達目標全般 | | | | | ①3年毎に実施 ②3年毎に実施 | 専攻会議・担当教員ワーキング・臨地実習協議会で授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | その他収集する情報 | | 診療放射線技師国家試験の合格者数や合格率 | | | | | 毎年 | 専攻会議・担当教員ワーキングで授業内容・方法を検討し、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |

7 医学部保健学科
(3) 検査技術科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------------|--|--|---|--|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 「医学検査管理総論」内の集中講義の後に実施する実習試験を、「日本臨床検査学教育協議会の「臨床検査実習Ⅰ」の到達目標」に基づき、各担当教員が評価する | 4年 | ・生命科学、医学、保健・医療に関する知識を身につけている。 | ・新しい検査手技を身につけている | ・検査の標準手順を示すことが出来、逸脱した場合の解決法を身につけている | ・標準手順を重視する態度、検査結果を適切に理解する姿勢 | 8月 | 毎年 | 専攻会議・教科担当教員ワーキングで授業内容・方法の見直しを行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成・技術習得判定法の見直しを行う。 |
| | 「臨床検査実習Ⅰ」の評価票により、臨床実習の指導者が評価する | 4年 | ・人体の構造や機能、代謝について系統的に理解している。 ・組織・細胞の形態や機能について系統的に理解している。 ・生体の成分や遺伝子の機能について系統的に理解している。 ・免疫の仕組みと生体防御に関する知識を身に付けている。 ・脳神経、呼吸、循環の生理に関する知識を身に付けている。 ・血液検査、輸血検査に関する知識を身に付けている。 ・感染症を引き起こす病原体に関する知識を身に付けている。 ・検査に関する情報処理、統計処理の方法を理解している。 ・スタンダードプリコーション（標準感染予防策）の基礎を身に付けている。 | ・生命科学、基礎医学、臨床検査科学を基盤とし、自ら知識と技術を習熟・発展・統合させることができる。 ・得られた検査結果を理解解釈することができる。 | ・検査結果が示す疾病病態を理解することができる。 ・問題解決のために必要な情報を収集し、活用することができる。 | ・検体を正しく取り扱う態度を備えている。 ・被検者と良好なコミュニケーションを構築する姿勢を備えている。 ・他の医療職者と十分な意思疎通に取り組む態度を備えている。 | 2月 | 毎年 | 専攻会議・教科担当教員ワーキング・病院検査部との反省会で授業内容・方法の見直しを行う。必要に応じて厚労省より示された到達目標に対応するための実習科目構成・技術習得判定法の見直しを行う。 |
| | 「臨床検査実習Ⅱ」の最終盤に実施する卒業研究発表会におけるプレゼン・質疑応答（パフォーマンス評価）または卒業研究報告書により各担当教員が評価する | 4年 | ・研究テーマに関する検査技術の基本を理解している ・研究目的と期待される成果について理解している | ・研究を行うための基本検査手技を習得している ・正確な結果を得るための機器整備について理解している | ・実験・実習や観察によって得たデータを正しく解析することができる ・検査結果の意義を正しく理解することができる ・実験・実習の記録やデータを取りまとめ、報告・発表することができる ・研究の限界を正しく認識することができる | ・測定機器を丁寧に取り扱う姿勢を備えている ・実験・実習のデータの保守や個人情報の保守に取り組む姿勢を備えている | 2月 | 毎年 | 専攻会議で授業内容・方法の見直しを行う。研究成果発表会での質疑応答、学生・教員間での意見交換または卒業研究報告書の評価を授業内容・方法の見直しに反映させる。必要に応じて係る到達目標に対応する研究テーマ構成の見直しを行う。 |
| 間接評価 | 授業評価アンケート「医学検査管理総論」「臨床検査実習Ⅱ」 | 4年 | DPに上げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 8月、2月 | 毎年 | 受講した学部学生にアンケート調査を行う。結果をもとに専攻会議・授業担当教員ワーキングで、授業内容と方法の点検を行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| その他 | 卒業生および雇用・進学先に対するアンケート調査 | 卒業生、雇用・進学先 | DPに上げられた到達目標全般 | | | | 9月 | 3年毎 | 卒業生・雇用先（新潟大学医学総合病院検査部・県内外主要病院・健診検査センター）にアンケート調査を行う。結果をもとに専攻会議で、授業内容と方法の点検を行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 臨床検査技師国家試験の合格者数および合格率（その経年的推移） | 卒業生 | DPに上げられた到達目標全般 | | | | 7月 | 毎年 | 出題傾向、難易度、得点分布を検証する。結果をもとに専攻会議・学年担当教員ワーキングで授業内容・方法の点検を行う。必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成・教育方法の見直しを行う。 |

8 歯学部

| | | |
|------|--------------|--|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて歯学部学務委員会教学IR室で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

8 歯学部
(1) 歯学教育プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|---------------------|--|----------|--|---|---|--|---------|---|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 「歯学スタディ・スキルズI」および「歯学スタディ・スキルズII」レポート評価 | 1年・2年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する。 ・明確かつ批判的に考え、経験や学習の成果を統合して思考を進める。 ・自己を省みて、行動やその結果を客観的に把握する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・自主学習のためにICTを活用する。 | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「国際歯科保健医療学入門」成績分布 | 2年 | <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル世界における経済、社会、生物学的な相互依存関係を理解し、自然ならびに人間社会・文化に対する理解を深める。 | | | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「医療統計学」成績分布 | 2年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・統計スキルを用いてデータを処理し、数量から意味を見出す。 | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「医療倫理」「歯科法医学」成績分布 | 2年・6年 | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理の原則を理解する。 | | | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「人体のしくみ」「生涯にわたる歯と咬合」「口腔と全身の関わり」改良版トリプルジャンプ評価 | 3年・4年・5年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する。 ・明確かつ批判的に考え、経験や学習の成果を統合して思考を進める。 ・自己を省みて、行動やその結果を客観的に把握する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・自主学習のためにICTを活用する。 ・チームのメンバーと協調して活動するとともに、リーダーシップを発揮する。 ・時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「総合模型実習」「臨床推論」成績評価 | 5年・6年 | <ul style="list-style-type: none"> ・口腔疾患の病因と予防・疫学、ならびに病態、診断と治療の原理・原則を理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> 科学的根拠に基づいた歯科医療を実践し、その成績を評価する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する。 ・明確かつ批判的に考え、経験や学習の成果を統合して思考を進める。 ・自己を省みて、行動やその結果を客観的に把握する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・自主学習のためにICTを活用する。 ・時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。 | | 3月 | 毎年 | 実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| 「臨床実習I」「臨床実習II」成績評価 | 5年・6年 | | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療において適切な感染予防対策を行う。 ・歯科医療において安全の確保を行う。 ・患者に対して有効な健康教育を行う。 ・インフォームドコンセントの原則を遵守し、患者の権利を尊重する。 ・科学的根拠に基づいた歯科医療を実践し、その成績を評価する。 ・正確な患者の記録を作成し、適切に保管する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら問題を見つけ、解決策を立案し、問題を解決する。 ・明確かつ批判的に考え、経験や学習の成果を統合して思考を進める。 ・自己を省みて、行動やその結果を客観的に把握する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・チームのメンバーと協調して活動するとともに、リーダーシップを発揮する。 ・時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・倫理的、道徳的、科学的な意思決定を行い、結果に対して責任を負う。 ・さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する。 ・自分の利益のまえに患者ならびに公共の利益を優先する。 | 3月 | 毎年 | 臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて構成内容の見直しを行う。（教学IR室および臨床実習委員会） | |

8 歯学部
(1) 歯学教育プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---------------|--------|---|--|--------------------------------|-------|---------|----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 「共用試験CBT」合格率 | 5年 | <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル世界における経済、社会、生物学的な相互依存関係を理解し、自然ならびに人間社会・文化に対する理解を深める。 ・人間の成長、発達、老化および健康に関する基礎科学を理解する。 ・口腔の健康や疾病の基礎をなす口腔生物学を理解する。 ・歯科医療に影響を与える医学、歯学、基礎科学の最新の成果を理解する。 ・口腔疾患の病因と予防・疫学、ならびに病態、診断と治療の原理・原則を理解する。 ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理の原則を理解する。 ・医療提供体制と医療保険制度を理解する。 | | | | 10月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「共用試験OCSE」合格率 | 5年 | | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療において適切な感染予防対策を行う。 ・歯科医療において安全の確保を行う。 ・患者に対して有効な健康教育を行う。 ・インフォームドコンセントの原則を遵守し、患者の権利を尊重する。 ・科学的根拠に基づいた歯科医療を実践し、その成績を評価する。 ・正確な患者の記録を作成し、適切に保管する。 | | | 10月 | 毎年 | 臨床予備実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて構成内容の見直しを行う。（教学IR室および臨床実習委員会） |
| | 「歯科医師国家試験」合格率 | 6年 | <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル世界における経済、社会、生物学的な相互依存関係を理解し、自然ならびに人間社会・文化に対する理解を深める。 ・人間の成長、発達、老化および健康に関する基礎科学を理解する。 ・口腔の健康や疾病の基礎をなす口腔生物学を理解する。 ・歯科医療に影響を与える医学、歯学、基礎科学の最新の成果を理解する。 ・口腔疾患の病因と予防・疫学、ならびに病態、診断と治療の原理・原則を理解する。 ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理の原則を理解する。 ・医療提供体制と医療保険制度を理解する。 | | | | 5月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| 間接評価 | 到達目標に関する質問紙調査 | 6年生 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学IR室） |
| その他 | 卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般の総括的自己評価 | | | | 卒後1年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学IR室） |
| | 卒業生雇用者調査 | 卒業生雇用者 | DPに掲げられた到達目標全般の他者からの総括的評価 | | | | 卒後1年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学IR室） |
| | 教育基盤機構実施調査 | 卒業生 | | | DPに掲げられた到達目標のうち汎用能力と態度・姿勢の自己評価 | | 卒後2年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標のうち、特に汎用的能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学IR室） |

8 歯学部
(2) 口腔保健福祉学教育プログラム 【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 | |
|-----------------|-----------------------------|-------|--|--|--|--|---------|--|--|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | | |
| 直接評価 | 「歯学スタディ・スキルズ」レポート評価 | 1年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見つけ、必要な情報を収集、分析、統合し、問題を解決する。 ・適切に自己評価する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・自主学習のためにICTを活用する。 | | 3月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） | |
| | 「社会調査法」成績分布 | 2年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・統計スキルを用いてデータを処理する。 | | 3月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） | |
| | 「医療倫理」成績分布 | 2年 | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理的原則を理解する。 | | | | | 3月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | 「診療補助I」成績分布 | 2年 | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科疾患の診査、処置、予防の原理・原則を理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療において適切な感染予防対策を行う。 ・歯科医療において安全の確保を行う。 ・適切な歯科診療補助を行う。 | | | | 3月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） |
| | PBL科目群改良版トリプルジャンプ評価 | 2年、3年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見つけ、必要な情報を収集、分析、統合し、問題を解決する。 ・適切に自己評価する。 ・時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・チームのメンバーと協調し、リーダーシップを発揮する。 ・自主学習のためにICTを活用する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな文化や価値を受容し、個性を尊重する。 | 3月 | 毎年 | 福祉現場実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて構成内容の見直しを行う。（教学IR室および担当科） | |
| | 「社会福祉現場実習I」「社会福祉現場実習II」成績評価 | 3年、4年 | <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者や障害者の身体的、心理的特徴を理解する。 ・社会福祉と社会保障の全体像を理解する。 ・児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉の理念と意義を理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉援助技術にもつじた適切な活動を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて専門家の支援やアドバイスを求める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・すべての患者・利用者に対して親身に対応し、相手の権利を尊重する。 ・個人情報・医療情報の秘密保持に万全を期す。 | 3月 | 毎年 | 福祉現場実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて構成内容の見直しを行う。（教学IR室および担当科） | |
| | 「歯科衛生士臨床実習III」成績評価 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> ・口腔の構造と機能を理解する。 ・高齢者や障害者の身体的、心理的特徴を理解する。 ・口腔の健康増進とオーラルヘルスケアの重要性を理解する。 ・歯科疾患の診査、処置、予防の原理・原則を理解する。 ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理的原則を理解する。 ・医療提供体制と医療保険制度を理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・歯科医療において適切な感染予防対策を行う。 ・歯科医療において安全の確保を行う。 ・個人、集団、社会に対して有効な歯科保健指導を行う。 ・インフォームドコンセントの原則を遵守する。 ・科学的根拠に基づいた歯科予防処置を実践し、その成績を評価する。 ・正確な患者・利用者の記録を作成し、適切に保管する。 ・適切な歯科診療補助を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・必要に応じて専門家の支援やアドバイスを求める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・倫理的、道徳的、科学的な意思決定を行い、結果に対して責任を負う。 ・すべての患者・利用者に対して親身に対応し、相手の権利を尊重する。 ・個人情報・医療情報の秘密保持に万全を期す。 ・自分の利益のまえに、患者・利用者ならびに公共の利益を優先する。 | 3月 | 毎年 | 臨床実習の見直しにつなげるとともに、必要に応じて構成内容の見直しを行う。（教学IR室および臨床実習委員会） | |
| 口腔保健福祉特論 レポート評価 | 4年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見つけ、必要な情報を収集、分析、統合し、問題を解決する。 ・適切に自己評価する。 ・時間管理と優先順位づけを行い、定められた期限内で活動する。 ・日本語や英語により口頭で、また文書を用いて有効なコミュニケーションを行う。 ・必要に応じて専門家の支援やアドバイスを求める。 ・自主学習のためにICTを活用する。 | | 3月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学IR室および担当科） | | |

8 歯学部
 (2) 口腔保健福祉学教育プログラム 【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---------------|--------|--|-----------|--------------------------------|-------|---------|----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 歯科衛生士国家試験合格率 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> ・口腔の構造と機能を理解する。 ・高齢者や障害者の身体的、心理的特徴を理解する。 ・口腔の健康増進とオーラルヘルスケアの重要性を理解する。 ・歯科疾患の診査、処置、予防の原理・原則を理解する。 ・歯科医療の実践が基盤としている法医学、倫理的原則を理解する。 ・医療提供体制と医療保険制度を理解する。 | | | | 5月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学1R室および担当科） |
| | 社会福祉士国家試験合格率 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉と社会保障の全体像を理解する。 ・児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉の理念と意義を理解する。 | | | | 5月 | 毎年 | 授業・実習内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。（教学1R室および担当科） |
| 間接評価 | 到達目標に関する質問紙調査 | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学1R室） |
| その他 | 卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般の総括的自己評価 | | | | 卒後2年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学1R室） |
| | 卒業生雇用者調査 | 卒業生雇用者 | DPに掲げられた到達目標全般の他者からの総括的評価 | | | | 卒後2年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標全般、特に専門科目分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学1R室） |
| | 教育基盤機構実施調査 | 卒業生 | | | DPに掲げられた到達目標のうち汎用能力と態度・姿勢の自己評価 | | 卒後2年 | 毎年 | 調査結果を基に、DPの到達目標のうち、特に汎用的能力についての見直しや、科目構成の見直しを行う。（歯学部教学1R室） |

9 工学部

| | | |
|------|--------------|--|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長が責任者となり、点検・評価専門委員会に対して評価作業の実施を指示する。点検・評価専門委員会は、各プログラムに対し以下の実施計画に基づく評価の実施および改善策の検討を指示し、その結果を取りまとめて学部長に報告する。学部長は、教授会（代議員会含む）に学位プログラム評価結果を報告した上で、改善が必要な場合は、各プログラムまたは工学部各種専門委員会に対して改善の実施を勧告する。改善の実施報告は点検・評価専門委員会が取りまとめて学部長および教授会に報告する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

9 工学部
(1) 機械システム工学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|------|--|--|---|---|-----------|-------|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用の能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 「工学リテラシー」、「情報セキュリティ概論」、および教養系科目の単位取得状況を評価する。教養系科目においては、卒業資格基準に則した人文社会系科目などに関して所定の単位を取得（60点以上）しているかを評価。 | 1年 | ・機械および機械関連分野に関する基礎理論と基礎技術を理解し、応用する能力ならびに必要な専門的知識と技術を統合し、説明する能力を身に着ける。 | | | | 3月 | 毎年 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| | 「技術者の心構え」、「卒業研修」、および「卒業研究」の評価 「卒業研修」、および「卒業研究」では、研究室における研究の準備、関連するゼミ、研究打合せ、装置の設計・製作またはシステムの設計、実験・計測・解析、中間発表などを通じて、研究の背景、目的および結果が社会に及ぼす影響についての理解を評価する。 「卒業研究」では、上記を進展させ、卒業研究発表と卒業論文提出を課し、上記能力に加えて問題解決能力、発展能力、報告能力などを総合的に評価する。 | 4年 | ・機械および機械関連分野に関する基礎理論と基礎技術を理解し、応用する能力ならびに必要な専門的知識と技術を統合し、説明する能力を身に着ける。 ・機械および機械関連分野に関する実験を計画、遂行し、データを解析、正しく考察し、報告する能力および要求に合った機械設計を個人および共同で行うことができる能力を身に着ける。 | ・機械関連技術の社会、自然、人類に及ぼす影響、効果およびその責任について、人間として十分に判断できる能力を身に着ける。 ・機械関連技術の社会、自然、人類に及ぼす影響、効果およびその責任について、人間として十分に判断できる能力を身に着ける。 | | ・実験によって得られたデータとその結果の考察に基づいて、設計問題を設定するとともに、その解決策を見つけ実行できる能力を身に着ける。 ・要求に合った機械設計を共同で行うことができる能力を身に着ける。 | 8月、2月 | 半年毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| | 工学系専門基礎科目群（物理学基礎、基礎数理解、数物演習、応用数理解、複素・フーリエ解析）において卒業資格基準に則して所定の単位を取得しているかを評価する。 | 2、3年 | | | 機械関連技術の社会、自然、人類に及ぼす影響、効果およびその責任について、人間として十分に判断できる能力 | | 6、8、12、2月 | 1ターム毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、評価の方法を検討する。 |
| | 「機械工作実習」、「製図基礎」、「設計製図」の単位取得により評価する。機械工作実習においては、実習の内容、結果および考察に関するレポートから理解度、創造力、遂行能力、問題解決能力、報告能力などを総合的に評価する。 製図基礎、設計製図では、課題を期限内に完成させて提出することを条件とし、提出された図面などを通じ、設計・製図法の習得度、製造方法と品質に関する理解度を主に評価し、共同で考えた問題設定と解決のアプローチ（デバイス）も評価する。 | 3年 | | ・機械および機械関連分野に関する実験を計画、遂行し、データを解析、正しく考察し、報告する能力および要求に合った機械設計を個人および共同で行うことができる能力を身に着ける。 | | ・要求に合った機械設計を共同で行うことができる能力を身に着ける。 | 6、8、12、2月 | 1ターム毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| | 「英語」、「初修外国語」などの外国語科目において、卒業資格基準に則して所定の単位を取得していることをもって合格とする。 | 1～4年 | | | 自らの考えを的確に記述、表現、発表し、他者との建設的、効率的な討議を行うコミュニケーション能力と専門分野における英語による読み書きおよびコミュニケーションの基礎能力を身に着ける。 | | 3月 | 毎年 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| 間接評価 | NBASを活用した学習達成度の確認 ・2年次以上学年において学年担当教員と学生とでNBASを活用して各学生の学習達成度を確認する。 | 1～4年 | プログラム到達目標全般の自己評価 | | | | 4月、10月 | 半年毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| | 授業アンケート、およびNBASを利用したカリキュラム満足度の調査 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 4月、10月 | 半年毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |
| その他 | 卒業生の調査 ・プログラムの就職担当を通じて、企業に就職した卒業生に対するアンケートを実施し、社会が求める能力、卒業生が修得した能力を調査する。合わせて、教育プログラムに対する意見交換を行う。 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 10月～3月 | 2年毎 | プログラム会議、およびプログラム内JABEE対策委員会にて成績分布を回覧し、授業改善つなげるとともに、必要に応じて係るカリキュラム、到達目標の見直しを検討する。 |

9 工学部
(2) 社会基盤工学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|--------|--|---|--|--|--|----------------------|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 学習・教育到達目標の項目(A)～(H)について、質的な達成度評価基準を定め、定期的な中間フォローアップを実施しながら、履修者が修了までに満たすことを求める。質的な達成度評価基準では、カリキュラム各科目について、目標各項目に対する専与度を数値化し、それを順位取得科目について積み上げた数値が所定の値を上回ることを求める。 | 2、3、4年 | (B) 自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。 | (C) 国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。 | (G) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し、建設的な討議ができる能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。 | (A) 人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。 | 最終評価は3月または9月（プログラム修了判定時） 中間フォローアップは4月（第3・5・7 semester開始月） | 最終評価、中間フォローアップともに1年。 | 社会基盤工学プログラム会議、および社会基盤工学プログラム教育改善検討委員会において達成度状況を点検し、必要に応じてカリキュラムおよび教育全般における諸施策の改善につなげる。 |
| | | | (D) 土木工学の主要分野である応用力学、土木材料学、水工学、地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。 | (E) 土木工学に関する実験を計画・遂行し、限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。 | (H) 土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し、必要に応じて他者と協働した上で課題を採択し解決する能力、ならびに生涯学習能力を身に付ける。 | (F) 土木工学の主要分野の演習や実習を通して、自己学習の習慣ならびに応用力を養い、問題を解決する能力を身に付ける。 | | | |
| 直接評価 | 学習・教育到達目標の項目(A)～(H)について、質的な達成度評価基準を定め、定期的な中間フォローアップを実施しながら、履修者が修了までに満たすことを求める。質的な達成度評価基準では、カリキュラム各科目について、目標各項目に対する専与度を重みとした成績評定の重み平均を目標各項目について評価し、所定の値を上回ることを求める。 | 2、3、4年 | (B) 自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。 | (C) 国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。 | (G) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し、建設的な討議ができる能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。 | (A) 人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。 | 最終評価は3月または9月（プログラム修了判定時） 中間フォローアップは4月（第3・5・7 semester開始月） | 最終評価、中間フォローアップともに1年。 | 社会基盤工学プログラム会議、および社会基盤工学プログラム教育改善検討委員会において達成度状況を点検し、必要に応じてカリキュラムおよび教育全般における諸施策の改善につなげる。 |
| | | | (D) 土木工学の主要分野である応用力学、土木材料学、水工学、地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。 | (E) 土木工学に関する実験を計画・遂行し、限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。 | (H) 土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し、必要に応じて他者と協働した上で課題を採択し解決する能力、ならびに生涯学習能力を身に付ける。 | (F) 土木工学の主要分野の演習や実習を通して、自己学習の習慣ならびに応用力を養い、問題を解決する能力を身に付ける。 | | | |
| 間接評価 | プログラム修了予定学生（4年次学生）全員を対象に、学習・教育到達目標の達成度に関する自己評価アンケートを実施する。 | 4年 | (B) 自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。 | (C) 国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。 | (G) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し、建設的な討議ができる能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。 | (A) 人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。 | 2月（4年プログラム修了時） | 1年 | 社会基盤工学プログラム会議、および社会基盤工学プログラム教育改善検討委員会において回答内容を点検し、必要に応じて学習・教育到達目標、カリキュラムおよび教育全般における諸施策の改善につなげる。 |
| | | | (D) 土木工学の主要分野である応用力学、土木材料学、水工学、地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。 | (E) 土木工学に関する実験を計画・遂行し、限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。 | (H) 土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し、必要に応じて他者と協働した上で課題を採択し解決する能力、ならびに生涯学習能力を身に付ける。 | (F) 土木工学の主要分野の演習や実習を通して、自己学習の習慣ならびに応用力を養い、問題を解決する能力を身に付ける。 | | | |
| その他 | 卒業生から50～100名程度を抽出し、学習・教育到達目標の達成、および設定内容および水準に関するアンケートを実施する。 | | (B) 自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。 | (C) 国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。 | (G) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し、建設的な討議ができる能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。 | (A) 人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。 | 9月 | 6年 | 社会基盤工学プログラム会議、および社会基盤工学プログラム教育改善検討委員会において回答内容を点検し、必要に応じて学習・教育到達目標、カリキュラムおよび教育全般における諸施策の改善につなげる。 |
| | | | (D) 土木工学の主要分野である応用力学、土木材料学、水工学、地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。 | (E) 土木工学に関する実験を計画・遂行し、限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。 | (H) 土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し、必要に応じて他者と協働した上で課題を採択し解決する能力、ならびに生涯学習能力を身に付ける。 | (F) 土木工学の主要分野の演習や実習を通して、自己学習の習慣ならびに応用力を養い、問題を解決する能力を身に付ける。 | | | |
| その他 | 卒業生の就職先機関・企業を対象に、卒業生の学習・教育到達目標の達成、および設定内容および水準に関するアンケートを実施する。 | | (B) 自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を身に付ける。 | (C) 国内外の地域における環境や文化の変遷と土木工学の発展との関係性を理解し、建設技術者としての倫理や地域住民に対する責任を自覚し、地域住民との連携を前提として地域の発展を支える能力を身に付ける。 | (G) 自分の考えを的確に記述・表現・発表し、建設的な討議ができる能力、および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身に付ける。 | (A) 人類の幸福と福祉について、固有の文化を尊重しつつ普遍的に考える能力と素養を修得し、持続可能な社会形成に貢献できる社会性と具体的技術を身に付ける。 | 9月 | 6年 | 社会基盤工学プログラム会議、および社会基盤工学プログラム教育改善検討委員会において回答内容を点検し、必要に応じて学習・教育到達目標、カリキュラムおよび教育全般における諸施策の改善につなげる。 |
| | | | (D) 土木工学の主要分野である応用力学、土木材料学、水工学、地盤工学の各分野の基礎知識を修得する。 | (E) 土木工学に関する実験を計画・遂行し、限られた時間内にデータを正しく解析・考察・取りまとめる能力を身に付ける。 | (H) 土木工学の専門的な知識および技術ならびに他分野の科学技術を総合し、必要に応じて他者と協働した上で課題を採択し解決する能力、ならびに生涯学習能力を身に付ける。 | (F) 土木工学の主要分野の演習や実習を通して、自己学習の習慣ならびに応用力を養い、問題を解決する能力を身に付ける。 | | | |

9 工学部
(3) 電子情報通信プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|--|--|--|---|-----------|-------|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | JABEE認定を受けた教育プログラムの評価 ・JABEE認定を受けた教育プログラムを実施し、教育プログラムで定めた基準を満たしていることを確認する。 | | DPIに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 基礎学力の評価 ・授業における筆記テストおよび課題レポートによって能力を点数化し評価する。学生が修得した授業科目の成果物（レポートや制作物等）を経年的に集め、目標とする学修成果がどのように身に付いてきたかを確認する。 | | ・数学、および自然科学に関する基礎知識を修得し、専門分野においてどのように応用されるかを理解すること ・総合工学技術、コンピューターやプログラミング、情報セキュリティに関する基礎知識を修得し、専門分野においてどのように応用されるかを理解すること ・電磁気学、電気回路などの電子情報通信工学の基礎知識を修得すること | ・電子情報通信工学の基礎知識がエレクトロニクス、情報通信および電力など専門領域のどのような課題に応用されるかを理解すること ・上記専門領域の基礎技術がどのように組み合わせられて実際の工業製品が作り出されているか、また電気電子・情報通信システムが構築されているかを理解すること | | | 6、8、12、2月 | 1ターム毎 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| 直接評価 | 国際的に通用する専門的能力と科学技術開拓能力の評価 ・PBL科目「電子情報通信設計製図」における制作物、レポートおよびプレゼンテーション、「卒業研修」でのレポートと中間発表の点数化により中間評価を行う。 | | | ・専門領域の基礎技術がどのように組み合わせられて実際の工業製品が作り出されているか、また電気電子・情報通信システムが構築されているかを理解すること | ・自ら実験を計画し遂行し、実験データを正確かつ工学的に解析・考察した上で、結果を分かり易く定められた期日までに的確に報告できる。 ・要求にあった課題を設定し、専門的知識・技術を駆使して理解・分析、考察した上で、創造を發揮して問題解決へのプロセスを的確に設計できる。 ・日本語による論理的な記述ができる。 ・他人の主張を理解することに努め、自分の考えを論理的に説明することや発表することができる、かつ他人と討論ができる。 ・科学技術関連の英文資料を理解でき、また技術文章の英語表現ができる。 | ・課題に対して自発的・自主的に学習し、探求心を持ち、継続的に学習する姿勢を備えている。 ・グループでの作業において、自分のなすべき行動を判断し、作業を実行できる。 ・グループでの作業において、他者の果たすべき役割を理解し、適切な働きかけができる。 | 8、2月 | 半年毎 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 授業科目「卒業研究」の評価 ・学修の総仕上げとなる授業科目「卒業研究」では未知なる問題への取り組みに関する進捗状況報告、及び成果報告としての卒業論文および卒業発表を点数化し評価する。本プログラムが目標とする学修成果が身に付いているか、配属研究室以外の複数の教員による卒業論文発表の評価を実施し、確認する。 | | | | ・自ら実験を計画し遂行し、実験データを正確かつ工学的に解析・考察した上で、結果を分かり易く定められた期日までに的確に報告できる。 ・要求にあった課題を設定し、専門的知識・技術を駆使して理解・分析、考察した上で、創造を發揮して問題解決へのプロセスを的確に設計できる。 ・日本語による論理的な記述ができる。 ・他人の主張を理解することに努め、自分の考えを論理的に説明することや発表することができる、かつ他人と討論ができる。 ・科学技術関連の英文資料を理解でき、また技術文章の英語表現ができる。 | ・課題に対して自発的・自主的に学習し、探求心を持ち、継続的に学習する姿勢を備えている。 | 2月 | 毎年 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| 間接評価 | 学習達成度の確認 ・半年に1度、全学年において担当教員と学生とで学習達成度の確認を記録簿もしくはNBASを利用して実施する。プログラム配属時から卒業までの経過を記録する。 | | DPIに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 半年毎 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 教職員と学生の懇談会 ・対象者については各学年担当が、教育プログラムに対して意見をを持った学生を2～3名選定する。 | | DPIに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 6月 | 毎年 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| その他 | 卒業生が備えている能力に関する調査（1） ・卒業生の就職先にて企業アンケートを実施し、卒業生が備えている能力に関して調査する。 | | DPIに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2月 | 3～4年毎 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | 卒業生が備えている能力に関する調査（2） ・卒業生や卒業生の雇用先企業からなる外部評価委員会を実施し、卒業生に関する情報と教育プログラムに対する意見交換を実施する。同委員会は、他大学、地元企業、都市部大手企業など多様な背景をもつ4～5名から構成される。 | | DPIに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3月 | 毎年 | プログラム教員会議で評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じてかかる到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |

9 工学部
(4) 知能情報システムプログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|-----------|---|---|---|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 応用数理解C、B、E、電磁気学、電気数理解I・IIの単位修得状況・成績分布 | 2年 | a) 数学、物理学などの自然科学に関する基礎理論を修得する。 | | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 基礎的な専門科目（離散数学・データ構造とアルゴリズム・電気回路・論理回路・オートマトンと形式言語・論理数学・技術英語）に対する単位修得状況・成績分布 | 2年 | b) 情報一般の原理を修得する。 c) コンピュータで処理される情報の原理を修得する。 d) コンピュータのソフトウェアに関する基礎的知識を修得する。 e) コンピュータのハードウェアに関する基礎的知識を修得する。 | d) 巨大なデータを扱う能力。 e) システムの体系・構造を理解し表現する能力。 | a) 新たな概念や視点を獲得することができる。 b) 論理的思考により、対象のモデル化、抽象化を行うことができる。 c) 問題を発見し、解決することができる。また、問題解決のためのシステム思考、批判的思考ができる。 f) 専門分野に関する英語の読み書き及びコミュニケーションができる。 | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | プログラミングA1・A2の単位修得状況・成績分布 | 2年 | d) コンピュータのソフトウェアに関する基礎的知識を修得する。 | a) 情報の構造を設計する能力及び計算を設計し表現する能力。 e) システムの体系・構造を理解し表現する能力。 f) 社会において情報を扱うシステムを作る能力及び運用する能力。 | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 発展的な専門科目（情報システムとセキュリティ・機械学習・数値計算プログラミング・情報理論）に対する単位修得状況・成績分布 | 3年 | d) コンピュータのソフトウェアに関する基礎的知識を修得する。 | a) 情報の構造を設計する能力及び計算を設計し表現する能力。 d) 巨大なデータを扱う能力。 e) システムの体系・構造を理解し表現する能力。 i) 情報一般の原理を自覚して情報社会に積極的に参画する能力。 j) 個人および社会に対する情報の意義や危険性を読み解く能力。 k) 社会においてルールを遵守しつつ情報を活用する能力。 | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 発展的な実験・実習（知能情報システム実験I/II/III/IV・研究室体験実習）に対する単位修得状況・成績分布 | 3年 | a) 数学、物理学などの自然科学に関する基礎理論を修得する。 b) 情報一般の原理を修得する。 c) コンピュータで処理される情報の原理を修得する。 d) コンピュータのソフトウェアに関する基礎的知識を修得する。 e) コンピュータのハードウェアに関する基礎的知識を修得する。 f) 社会において情報を扱うシステムを構築し活用するための技術を修得する。 | a) 情報の構造を設計する能力及び計算を設計し表現する能力。 b) 形式的なモデルのもとで演繹する能力。 c) 情報を扱う機械を作る能力及び運用する能力。 d) 巨大なデータを扱う能力。 e) システムの体系・構造を理解し表現する能力。 f) 社会において情報を扱うシステムを作る能力及び運用する能力。 g) 複雑なシステムの作成を管理する能力。 h) 社会において情報に関わる問題を発見し解決する能力。 | d) 科学技術分野の論文・マニュアルなどが理解でき、また、正しい技術文書を書くことができる。 e) 人前で、資料に基づき、発表できる。 g) 議論において自分の考えを的確に伝えられると共に、他人の主張を正しく理解できる。また、共同作業を円滑に進めることができる。 | a) 技術者としての倫理・責任を自覚し、積極的に社会に関わることができる。 b) 自主的、継続的に学習や問題解決に取り組むことができる。 c) 他分野への興味を持ち、多種多様な考え方を結びつけて考えることができる。 | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業研修の成績と卒業研究のルーブリックによる評価 | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般評価 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般評価 | | | | 12月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業生の雇用先に対するアンケート | 卒業生の雇用先企業 | DPに掲げられた到達目標全般評価 | | | | 12月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に汎用的能力や態度・姿勢についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |

9 工学部
(5) 化学システム工学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|---|-----------|-------|-------|-----------|------|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 学修・教育目標(A) 政治経済、環境問題など社会の動きを理解できること、異なる国や地域の特性を理解し適切に行動できること。 ・人文社会・教育科学科目より4単位以上を取得すること。科目の理解度をレポート、試験等で評価する。 ・人文科学・教育科学及び新潟大学個性化科目から2単位以上を取得すること。科目の理解度をレポート、試験等で評価する。 ・英語2単位以上、初修外国語2単位以上を取得すること。外国語を用いて文化や価値観を理解する能力、外国語を用いたコミュニケーション基礎能力を演習や定期試験等で評価する。 ・「環境レポート」および「エネルギー講演会レポート」を提出させ、資源・エネルギー、環境問題についての理解度を評価する。 | 1、2年 | ・地域や世界における政治経済問題、資源・エネルギー、環境問題など地域社会や世界の社会現象などを理解するための社会科学的素養を持つこと。 ・地域や時代により文化や価値観が違うことを理解し、異なる地域の人々と適正に交流するための人文科学的素養を持つこと。 ・外国語によって書かれた、人文科学、社会科学、自然科学に関連する事柄を理解するための言語力を身につけること。 ・外国語を用いて自分の考えを他人に伝える能力を身につけること。 | | | | 3月 | 毎年 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | 学修・教育目標(B) 化学技術者・研究者として社会に対する役割や責任を理解でき、倫理的に正しい判断ができること ・工場見学（2年生1日研修、3年生学外研修）後に、工学が社会に果たす役割や責任等に関してレポートを提出させ、理解度を評価する。 ・「卒業研究」、「卒業研究」において、研究が社会にどのような影響を与えるのかを考察させ、卒業研修レポート、卒業研究論文によりルーブリックを用いて理解度を評価する。 ・「技術者の心がまえ」の単位を取得すること。科目の理解度をレポート等で評価する。 ・「知的財産概論」の単位を取得すること。科目の理解度を小テストと試験で評価する。 | 1～4年 | | | | | 3月 | 毎年 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | 学修・教育目標(C) 自然科学、情報技術などに関する知識、ならびに応用化学と化学工学に共通な知識を修得し、それらを用いて課題を解決できること。 ・数学、物理学、化学、生物学など自然科学に関わる教養科目（自然科学系共通専門基礎科目、自然科学科目）および情報処理に関わる科目（情報リテラシー科目）の講義・演習より11単位以上を取得すること。科目の理解度をレポート、定期試験等で評価する。 ・工学リテラシー入門の単位を取得すること。工学部専門基礎科目より10単位以上を取得すること。科目の理解度および問題解決能力をレポート、定期試験等で評価する。 ・「情報セキュリティ概論」の単位を取得すること。科目の理解度をレポートで評価する。 ・「総合工学概論」「総合技術科学演習」の単位を取得すること。科目の理解度をレポート等で評価する。 ・両コース共通の選択必修科目である「有機化学（Ⅰ）」「無機化学（Ⅰ）」「分析化学（Ⅰ）」「物理化学Ⅱ」「計測化学Ⅰ、Ⅱ」「高分子化学概論」「高分子化学Ⅰ、Ⅲ」「無機工業化学」および他学科が開設している専門科目の講義を聴講すること。科目の理解度および問題解決能力、論理的記述能力をレポート、定期試験等で評価する。 ・化学工学コースは、「化学実験1、2」の単位を取得すること。化学知識の理解度、化学実験を安全に実施できる能力、実験結果を適切に解釈できる能力、知識と実験を相互に関連づけて理解できる能力を、実験態度、実験レポートにより評価する。 ・両コース共通の選択必修科目である「反応工学Ⅰ」「拡散操作Ⅰ」「物理化学Ⅰ」「移動論基礎」「プロセス制御」の講義を履修すること。科目の理解度および問題解決能力、論理的記述能力をレポート、定期試験等で評価する。 | 1、2年 | ・自然科学に関する基礎知識を習得し、自然現象を理解するためにそれらの知識を利用できること。 ・情報処理技術に関する基礎知識を習得し、それらを利用して情報処理機器の操作、処理操作ができること。 ・数学、物理、化学などの自然科学を工学に利用するための専門基礎知識を習得し、これらの分野についても基礎的な問題を解けること。 ・化学関連分野以外の工学に関する専門基礎知識を習得すること。 ・化学科目に関する専門知識を習得し、それらに関する問題を解決できること。その過程と結果を他人に説明できること。 ・応用化学コースと化学工学コースに共通の化学技術基盤科目に関する専門知識を習得し、それらに関する問題を解決できること。その過程と結果を他人に説明できること。 | | | | 6、8、12、2月 | ターム毎 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |

9 工学部
(5) 化学システム工学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|------------------------|---|-------|-------|-----------|------|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | <p>学修・教育目標(D-1)応用化学コースでは、分子や集合体組織構造の設計、合成反応系や触媒の設計・開発、およびこれらを支援する化学に関して、与えられた課題を解決するための選択肢を定められた期間内に提示する能力を持つこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応用化学系専門科目および展開科目に位置づけられている講義科目を履修すること。それぞれの講義科目について理解度および問題解決能力をレポート、定期試験等で評価する。日本語による論理的記述能力をレポートにより評価する。計画的作業能力をレポート提出状況により評価する。 ・「応用化学演習Ⅰ～Ⅴ」に関して、化合物の合成方法、解析方法、分析方法等の合理的設計能力、問題解決能力および日本語による論理的記述能力をレポートにより評価する。計画的作業能力を実施状況、レポート提出状況等により評価する。 ・「無機化学実験(Ⅰ)」「分析化学実験(Ⅰ)」「物理化学実験(Ⅰ)」「有機化学実験(Ⅰ)」「高分子化学実験」の全ての単位を取得すること。実験操作の習熟度、データ取得、解析能力および日本語による論理的記述能力を実験態度、レポート等により評価する。計画的作業能力をレポート提出状況により評価する。また、チームを組んで課題にあたる場合にはチームワークへの貢献度を実験態度、レポート等により評価する。 ・演習、実習、実験等において、条件を変えた場合の結果の予想、課題設定の提案などに関する考察を行わせ、目的性、実現性を評価する。 | 2、3年 | | <ul style="list-style-type: none"> ・無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、高分子化学の5分野に関する専門知識を習得し、それらの分野に関する問題を解決できること。その過程と結果を他人に説明できること。 ・無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、高分子化学の5分野に関する専門知識を総合的に利用して、化合物の合成方法、解析方法、分析方法等を合理的に設計できること。問題解決の過程と結果を他人に論理的に説明できること。 ・無機化学、分析化学、物理化学、有機化学、高分子化学の5分野に関する実験を安全に適切に実施できる能力、データを解析し論理的に結論を導くことができ、他人に説明できること。 ・演習、実習、あるいは実験に関連して、解決方法や実験方法を想定できること。 | | | 6、8、12、2月 | ターム毎 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | <p>学修・教育目標(D-2)化学工学コースでは、材料開発、化学装置やプロセス、プラントの設計、開発、運転、およびこれらを支援する化学技術に関して、与えられた課題を解決するための選択肢を定められた期間内に提示する能力を持つこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学工学系専門科目および展開科目に位置づけられている講義科目を履修すること。それぞれの講義科目について、理解度および問題解決能力、論理的記述能力をレポート、定期テストなどで評価する。 計画的作業能力を実施状況、レポート提出状況により評価する。 ・「設計製図」、「反応工学演習」「分離工学演習」「移動現象演習」「化学工学英語」「化学工学計算演習」の全ての単位を取得すること。化学装置の設計や運転指針の提示などを合理的に行う能力、および日本語による論理的記述能力、論理的記述能力を図面あるいはレポートにより評価する。計画的作業能力を図面あるいはレポートの提出状況により評価する。 ・「化学工学実験」の単位を取得すること。実験操作の習熟度、データ取得、解析能力および日本語による論理的記述能力を実験態度、レポートにより評価する。計画的作業能力をレポート提出状況により評価する。 ・演習、実習、実験等において、条件を変えた場合の結果の予想、課題設定の提案などに関する考察を行わせ、目的性、実現性を評価する。 | 2、3年 | | <ul style="list-style-type: none"> ・反応工学、分離工学、移動現象、プロセスシステム工学の4分野および化学工学の応用分野に関する専門知識を習得し、それらの分野に関する問題を解決できること。その過程と結果を他人に説明できること。 ・反応工学、分離工学、移動現象、プロセスシステム工学の4分野および化学工学の応用分野に関する専門知識を総合的に利用して化学装置、運転方法等の合理的設計ができること。問題解決の過程と結果を他人に論理的に説明できること。 ・反応工学、分離工学、移動現象、プロセスシステム工学の4分野および化学工学の応用分野に関する実験を安全に適切に実施できること。データを解析し論理的に結論を導くことができること。その過程と結果を他人に説明できること。 ・演習あるいは実験に関連して、解決方法や実験方法を想定できること。 | | | 6、8、12、2月 | ターム毎 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |

9 工学部

(5) 化学システム工学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|------------|------------------------|-----------|---|--|-----------|-------|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | ・「応用化学演習Ⅰ～Ⅴ」に関して、化合物の合成方法、解析方法、分析方法等の合理的設計能力、問題解決能力および日本語による論理的記述能力をレポートにより評価する。計画的作業能力を実施状況、レポート提出状況等により評価する。 | 1～4年 | | | | ・ターム末に自己の学修成果を点検し、次のタームの学修目標を設定できること。その結果を定められた期間内に提出すること。 ・レポート等の課題を定められた期限内に内容を整えて提出できること。 ・4年生では、卒業研修、卒業研究に従事した時間を記録し、それを考慮して実験や文献調査、授業準備などの実施計画を立てることができること。 | 3月 | 毎年 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | ・「無機化学実験(Ⅰ)」 「分析化学実験(Ⅰ)」 「物理化学実験(Ⅰ)」 「有機化学実験(Ⅰ)」 「高分子化学実験」の全ての単位を取得すること。実験操作の習熟度、データ取得、解析能力および日本語による論理的記述能力を実験態度、レポート等により評価する。計画的作業能力をレポート提出状況により評価する。また、チームを組んで課題にあたる場合にはチームワークへの貢献度を実験態度、レポート等により評価する。 | 1～4年 | | | ・同じテーマについて個人の意見を発表できること、他人の意見を理解すること、合意形成を目的とした討論ができること。 ・チーム内で役割を分担して作業を行い、チームとしての結論を形成し、報告できること。 ・日本語以外でコミュニケーションを行うための基礎能力を持つこと。 ・英語で書かれた演習問題、専門書、論文等の内容を理解できること ・卒業研究について、研究内容や結論を合理的に、明瞭に説明できること。質問に対して適切に対応できること。 | | 6、8、12、2月 | ターム毎 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | ・演習、実習、実験等において、条件を変えた場合の結果の予想、課題設定の提案などに関する考察を行わせ、目的性、実現性を評価する。 | 4年 | | | ・卒業研究の背景、研究の必要性を理解できること。 ・研究の目的を理解し、目的を達成するための解決策を複数提示できること。複数の解決策から最も優れている解決策を合理的に選択できること。 ・研究成果の意義を適切に判断できること。また、将来の課題を提示できること。 | | 8、2月 | 学期毎 | プログラム自己点検WGで評価結果に対する検討を行う。授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| 間接評価 | 学生調査① ・プログラムに関するアンケートを実施する | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 8、2月 | 毎年 | 3年分のアンケート結果をデータ化し、授業内容・方法の改善に活用する。 |
| | 学生調査② ・4年生から点検委員を選出し、科目資料および教育データの確認ならびにアンケートを実施する | 4年 (数名) | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 9月 | 毎年 | プログラムの到達目標・評価の適正さを点検するとともに、改善が必要なものについては、プログラム自己点検WGで検討し、授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | 学生自身でプログラムの各学習・教育到達目標に対する達成度を評価する | 1～4年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | ターム毎 | 「前タームの自己点検」、「次タームの学修目標の設定」を定期的に行って、学習・教育到達目標に対する学生自身の達成度を継続的に点検・反映することで、主体的な学習を促す。 |
| その他 | 雇用先、卒業生等に対する調査： ・卒業生および雇用先等の実務者から点検委員を選出し、科目資料および教育データの確認ならびにアンケートを実施する | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 3月 | 3-4年毎 | プログラムの到達目標・評価の適正さを点検するとともに、改善が必要なものについては、プログラム自己点検WGで検討し、授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| | 卒業生に関する調査： ・卒業生の就職先にて企業アンケートを実施し、卒業生が備えている技能に関して調査する。 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 2月 | 3-4年毎 | プログラムの到達目標・評価の適正さを点検するとともに、改善がひつようなものについては、プログラム自己点検WGで検討し、授業内容・方法の見直しにつなげる。 |

9 工学部
(6) 材料科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|-----------|--|--|---|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 基礎的科目（物理学基礎DI、BII、応用数理解A、E、物理学数学、基礎無機化学、基礎有機化学）における単位修得状況・成績分布 | 1～2年 | a) 数学（解析学・線形代数）に関する知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 b) 物理学（力学）に関する基礎的知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 c) 化学（無機化学・有機化学）に関する基礎的知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 | | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 基礎的専門科目（基礎電磁気学、基礎解析力学、基礎量子力学（工）、基礎統計物理、高分子科学、基礎材料物理学、基礎材料組織学）における単位修得状況・成績分布 | 2年 | b) 物理学（力学・電磁気学・量子力学・統計力学）に関する基礎的知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 c) 化学（物理化学・分析化学・高分子化学・生物化学）に関する基礎的知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 d) 機械工学（材料組織学・材料評価学）に関する知識を習得し、これを発展的科目に活用することができる。 | | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 総合的科目（技術者の心がまえ、知的財産概論、情報セキュリティ概論、材料科学概論、計測工学）における単位修得状況・成績分布 | 1～4年 | | d) 材料科学に関する専門的学問・技術を活用し、新たな課題解決に応用できる。 | | b) 技術者としての倫理・責任を自覚することができる。 c) 科学技術の人間社会や環境に及ぼす影響と効果を多面的に理解・予想できる。 | 年度末 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 発展的専門科目（応用電磁気学、応用量子力学、応用統計物理、物質構造論、磁性・超伝導、受動電気回路素子論、材料分析化学、電気化学、光化学、触媒化学、高分子材料化学、機能性高分子材料、工業生化学、生体分子工学、生物材料工学、半導体物性・デバイス、材料評価学）における単位修得状況・成績分布 | 2～3年 | b) 物理学（力学・電磁気学・量子力学・統計力学）に関する専門的知識を習得し、これを材料科学に活用することができる。 c) 化学（無機化学・有機化学・物理化学・分析化学・高分子化学・生物化学）に関する専門的知識を習得し、これを材料科学に活用することができる。 d) 電子工学（半導体・電子部品）および機械工学（材料組織学・材料評価学）に関する専門的知識を習得し、これを材料科学に活用することができる。 | a) 材料機能を発現させる材料物性に関する学術体系を、原子・分子から理解し予想できる。 b) 材料機能を作り込む材料開発に関する学術体系を、原子・分子から理解し予想できる。 c) 材料科学に関する専門的学問・技術を身に付け、材料機能を解明できる。 | | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 実験・実習科目（物理学基礎実験、化学実験、材料科学実験I/II、材料科学PBL）における単位修得状況・成績分布 | 2～3年 | e) 基礎知識を活用して自主的、継続的に学ぶことができる。 | d) 材料科学に関する基礎的学問・技術を活用し、新たな課題解決に応用できる。 e) 専門知識を活用して自主的、継続的に学ぶことができる。 | a) グループでの共同作業を通して、互いに能力を高め合い、協力して要求された課題を達成できる。 b) 自らの考えを的確に記述・表現し、他者と建設的に討議できる。 | | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 科学技術英語科目（技術英語、論文輪講）における単位修得状況・成績分布 | 4年 | | | c) 専門分野に関する英語の読み書きおよびコミュニケーションができる。 | a) 様々な文化・学問に触れあうことができる。 | 各学期終了時 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業研修と卒業研究の単位修得状況・成績分布 | 4年 | e) 基礎知識を活用して自主的、継続的に学ぶことができる。 | a) 材料機能を発現させる材料物性に関する学術体系を原子・分子から理解し予想できる。 b) 材料機能を作り込む材料開発に関する学術体系を原子・分子から理解し予想できる。 c) 材料科学に関する専門的学問・技術を身に付け、材料機能を解明できる。 d) 材料科学に関する専門的学問・技術を活用し、新たな課題解決に応用できる。 e) 専門知識を活用して自主的、継続的に学ぶことができる。 | b) 自らの考えを的確に記述・表現し、他者と建設的に討議できる。 | b) 科学技術者としての倫理・責任を自覚することができる。 c) 科学技術の人間社会や環境に及ぼす影響と効果を多面的に理解・予想できる。 | 年度末 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 4年 | DPに上げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート | 卒業生 | DPに上げられた到達目標全般評価 | | | | 12月～3月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業生の雇用先に対するアンケート | 卒業生の雇用先企業 | DPに上げられた到達目標全般評価 | | | | 12月～3月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に汎用的能力や態度・姿勢についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |

9 工学部
(7) 建築学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|-----------|--|--|--|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 基礎的な専門科目（総合工学概論、総合技術科学演習、技術者の心がまえ、知的財産概論、情報セキュリティ概論、工学リテラシー入門、エンジニアのためのデータサイエンス入門、建築学概論、建築図学I・II）について、単位修得状況・成績分布の確認を実施し、評価を行う。 | 1年 | | 地球全体と地域社会の関係を理解することができる。 | 建築分野における技術者倫理の重要性を理解することができる。 | 建築学の工学的な基礎となる数学、自然科学、情報技術と、語学、人文科学、社会科学に関する基本的知識を修得する姿勢を備えている。 | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 建築学プログラム専門応用科目群（選択必修科目及び選択科目）の科目について、単位修得状況・成績分布の確認を実施し、評価を行う。 | 2年及び3年 | <ul style="list-style-type: none"> ・建築の規模計画、配置計画、動線計画、寸法計画および設計について理解している。 ・建築構造計画、建築構造計算、および建築構造設計について理解している。 ・建築環境計画、建築設備計画・設計について理解している。 ・建築材料、建築生産計画について理解している。 ・都市計画・設計について理解している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・建築が地球環境にどのように影響を与えているかを理解することができる。 ・建築と持続可能な社会の関連を理解する能力を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・国内のみならず世界の歴史や文化に関する知識を身に付けている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・建築学の主要分野である建築設計・計画、建築構造、建築環境・設備、建築法規、建築生産、並びに都市・地域計画をはじめとする建築関連分野に関して、設定された自然環境条件、社会的条件を理解し、これらに対応した基礎的知識を習得する姿勢を備えている。 ・地球環境の保全と人間の健康および安全をほかり、持続可能な社会を実現していくことを緊急の課題と認識し、建築を、地域および地球規模の環境との関係においてとらえ、人類の安全と利益、および地球社会と地域社会の持続的発展に貢献する態度を備えている。 | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業論文及び卒業論文発表会、卒業設計及び卒業設計発表会の評価 配属研究室の教員を含む複数の教員により以下の評価を実施し、確認する。 ・1年間、卒業研究・設計に向き合ってきた学生の姿勢・能力から評価する。 ・卒業研究の背景目的や、卒業設計のプロジェクト設定が適切かを評価する。 ・卒業研究の研究成果や、卒業設計の設計成果を評価する。 ・卒業研究の「まとも」や、「まとも」における「本研究の意義」、卒業設計の「設計内容の実施で見込まれる効果」を評価する。 ・卒業論文、卒業設計の発表に至るまでを総合的に評価する。 ・理論モデルの適用や導出などの方法論、分析・プレゼン・CADソフトなどの使いこなしを評価する。 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> ・地球環境の保全と人間の健康および安全をほかり、持続可能な社会を実現していくことを緊急の課題と認識し、建築を、地域および地球規模の環境との関係においてとらえ、人類の安全と利益、および地球社会と地域社会の持続的発展に貢献できる能力を身に付ける。 | <ul style="list-style-type: none"> ・建築が地球環境にどのように影響を与えているかを理解し、これらを解決することができる。 ・建築と持続可能な社会の関連を理解し、これらを可能とする能力を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の既往研究の歴史と背景をなす文化に関する知識を身に付けている。 ・建築や都市の設計にあたり、地域住民の立場にたつことの重要性を理解する能力を身に付けている。 ・人と社会や環境の関係について歴史的理解と改善方法を理解する能力を身に付けている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・建築学の主要分野である建築設計・計画、建築構造、建築環境・設備、建築法規、建築生産、並びに都市・地域計画をはじめとする建築関連分野に関して、設定された自然環境条件、社会的条件を理解し、これらに対応した知識を習得する姿勢を備えている。 ・人間社会全般や地域固有の文化と歴史、公共的福祉への洞察力を高め、その継承と改善のために建築技術を適切に用い、かつ建築技術が社会・自然・人類に及ぼす影響・効果を的確に把握し、建築家・技術者としての責任を自覚する能力を身に付けている。 ・与えられた建築学に関する課題に対して、調査・実験を企画・実行し、データを解析・解釈し、定められた期間で結果を取りまとめ、報告する能力を身に付けている。 | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| 間接評価 | 卒業時アンケート | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般評価 | | | | 12月～3月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業生の雇用先に対するアンケート | 卒業生の雇用先企業 | DPに掲げられた到達目標全般評価 | | | | 12月～3月 | 3年毎 | 調査結果を基に、DPに到達目標全般、特に汎用的能力や態度・姿勢についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議で検討する。 |

9 工学部
 (8) 人間支援感性科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|------|--|------------------------------------|--|--|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 実践プログラミングI、II、電気回路、応用教理E(確率・統計学)、電気教理II(フーリエ解析)の単位修得状況・成績分布 | 2年 | 工学者に求められる基礎科学を学修する。 | 情報工学をベースとした、医療、福祉を学修する。 | | | 各学期終了時 | 毎年 | 内容・方法・到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 音楽工学入門、コミュニケーションツールとしての視覚造形、健康スポーツシステム論の単位修得状況・成績分布 | 2年 | | 情報工学をベースとした、スポーツ、音楽、美術を学修する。 | | | 各学期終了時 | 毎年 | 内容・方法・到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 人間支援感性科学実験I、IIの単位修得状況・成績分布 | 2年 | 工学者に求められる基礎科学を学修する。 | | | | 各学期終了時 | 毎年 | 内容・方法・到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 人間支援感性科学実験III、IVの単位修得状況・成績分布 | 3年 | 情報工学をベースとした、医療、福祉、スポーツ、音楽、美術を学修する。 | 多様化するソフトウェアニーズに対応できる知識と能力を学修する。 | 創造的・協働的にソフトウェアニーズに対応し、その結果を適切な形式で報告することができる。 | | 各学期終了時 | 毎年 | 内容・方法・到達目標の見直しをプログラム会議で検討する。 |
| | 卒業論文及び卒論発表会の評価 | 4年 | 工学者に求められる基礎科学を学修する。 | 情報工学をベースとした、医療、福祉、スポーツ、音楽、美術を学修する。 | 多様化するソフトウェアニーズに対応できる知識と能力を学修する。 | 創造的・協働的にソフトウェアニーズに対応し、その結果を適切な形式で報告することができる。 | 2月 | 毎年 | 卒業研究・論文、作品等による評価（科学的思考力、研究開発力等を総合評価する）をプログラム会議にて行う。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度調査 | 1年 | 授業アンケート（スコア・自由記載）を活用する。 履修状況と成績状況を随時確認しながら必要に応じて個別評価を行い、対象学生から学修状況についてインタビューする。 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しをプログラム会議にて行う。 |
| | | 2年 | | | | | | | |
| | | 3年 | | | | | | | |
| | | 4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価をする。 | | | | 2月 | 毎年 | |
| その他 | 卒業生に対するアンケート調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般に関して、卒業生若干名を対象にアンケート調査を実施する。 | | | | 未定 | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標全般、特に専門分野固有の能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議にて行う。 |

9 工学部
(9) 協創経営プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|----------------------------------|------|---|--|--|--|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 最終年次に履修する集大成科目群（PBL）の単位取得状況・成績分布 | 4年 | ●実践型学習と講義・演習の繰り返しを通じ、社会における企業等組織の経済的活動の実際を経験的かつ論理的に理解している。 | ●社会科学の視座から工学と社会を結び、グローバルな視点を有して地域社会や産業の発展に貢献できる。 | ●社会に潜在する課題を探索し、顕在化することで課題の解決に必要な知識、手段とを結びつけ、解決までの道のりを示すことができる。 ●課題解決のために求められる専門的学分分野・科目を特定し、自ら学習、習得した成果を応用して具体的解決策を提示できる。 | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しに繋げるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目の見直しをプログラム会議において行う。 |
| | パッケージ科目群の単位取得状況 | 2・3年 | ●自然現象を分析するために必要な自然科学・情報技術の基礎知識を修得している。 ●課題解決に必要な特定の工学分野の基礎知識を系統的に理解している。 | | | ●社会、文化、環境等を多面的に理解しつつ、科学と技術の融合による新しい価値を自ら創造し、かつこれらが社会や自然に及ぼす影響と効果を自省的に考察することができる。 | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しに繋げるとともに、必要に応じて各パッケージ科目群を構成する科目の見直しをプログラム会議において行う。 |
| | 主要科目の単位取得状況・成績分布 | 2・3年 | | ●種々のグループ活動において、異なる背景を持つメンバー間の価値観、利害、意見を調整、集約し、集団として最高のパフォーマンスを発揮することで円滑に目的を達成できる。（経営管理と社会的責任、プロジェクト・マネジメント基礎） ●統計、アンケート、インタビューなどによる定量または定性データを用い、社会や市場、環境等を定量的に分析、把握できる。（マーケティング基礎） | ●工学から経営にわたる領域において、適切な言語と表現方法を用いて円滑なコミュニケーションができる。（科学技術表現法、技術英語） | ●グループでの共同作業においてメンバーの意見に傾聴しつつ、障害を克服して目標達成を図ると同時に、グループとしての課題解決力向上に常に配慮し続ける態度を備えている。（経営管理と社会的責任、プロジェクト・マネジメント基礎） ●技術者としての倫理・責任を自覚することができる。（経営管理と社会的責任、プロジェクト・マネジメント基礎） | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しに繋げるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目の見直しをプログラム会議において行う。 |
| 間接評価 | 集大成科目の自己評価ルーブリックシート | 4年 | DPに掲げられた到達目標の自己評価 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しに繋げるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目の見直しをプログラム会議において行う。 |
| その他 | カリキュラムの体系的性 | 2～4年 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 1月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しに繋げるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目の見直しをプログラム会議において行う。 |
| | 卒業生調査の結果を用いた評価 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標のうち、特に汎用的能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議において行う。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標のうち、特に汎用的能力についての見直しや、科目構成の見直しをプログラム会議において行う。 |

10 農学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて教育検討委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

10 農学部

(1) 応用生命科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|-------|---|---|---|---|---------|----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | プログラム所属の学生について、教養科目、農学部共通基礎科目、応用生命科学プログラムの必修科目と選択必修科目のテストおよびレポートにより直接評価を行う。単位修得状況、成績分布等も評価指標にする。 | 2年～4年 | 農学分野に共通する専門基礎知識および応用生命科学分野に共通する専門基礎知識を理解し、説明できる | 微生物・植物・動物の生命現象を分子や細胞レベルで理解し、これらを解明するために必要な実験スキル・分析技術を身につけ、関連する実験・解析を的確に行うことができる | 社会人として必要な自然科学及び社会科学の教養と幅広い知識、倫理観を理解できる | 自然科学や社会科学の基礎理論を広く学び、科学的な思考法を身につけることで様々な事象を論理的に考えることができる | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じてプログラム内でFDを行い、到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | プログラム所属の学生について、卒業研究（背景および目的、研究方法の妥当性や結果に対する論理的考察能力）について、卒業論文を査読し直接評価する。また、応用生命科学演習（ゼミナール）について直接評価を行う。単位修得状況、成績分布等も評価指標にする。 | 2年～4年 | | 応用生命科学の基礎知識及び理論、実験技術に基づき応用生命科学分野の課題を実験科学的に探求し、実験結果をまとめ、考察するとともに、課題を解決することができる | 多様な学習を通して他者と豊かに交流ができ、多面的な視点から物事の理解を深め、これらについて発表・情報発信・討論することができる | 常に広い分野に関心を持ち、新しい知識や技術を積極的に学び続けることができる | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じてプログラム内でFDを行い、到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | | | | | ローカルな視点とグローバルな視点を併せ持ち、状況に応じて適切な思考を行い、判断を下すことができる | 自ら社会における課題を見出し、その解決に向けて意欲を持って取り組むことができる | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じてプログラム内でFDを行い、到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| 間接評価 | 卒業研究を実施するための基礎学力・実験技術が身についているかを振り返りで評価するため、プログラム所属の学生について、3年生の第1ターム開始前に専門科目のアンケートを実施し、必要に応じて個別の面談を実施する。また卒業時に、学生の大学における学習についてアンケートを実施する。また、単位修得状況、成績分布等も評価指標にする。 | 1年～4年 | | | 卒業研究を実施するための基礎学力・実験技術が身についている | | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげ、必要に応じてプログラム内でFDを行い、到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 |
| | | 卒業時 | | | | | | | |

10 農学部

(2) 食品科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|-------|---|---|--|---|---------|----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 農学部共通基礎科目の単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・農学分野に共通する専門基礎知識を身に付け、農業・食料関連産業について理解している。 | | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| | 専門基礎科目の単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・食品科学分野における基盤となる専門基礎知識（食品の原材料、機能、加工、品質管理・流通に関する専門基礎知識）を身に付けている。 | ・食品科学分野における諸課題の解決に向け、高度なフードサイエンス・テクノロジーに対応することができる。 | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| | 専門科目の単位修得状況・成績分布 | 3年 | ・食品科学分野におけるより広範かつ専門的な知識を身に付けている。 | ・食品科学分野における諸課題の解決に向け、高度なフードサイエンス・テクノロジーに対応することができる。 | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| | 「分析化学実験（農）、生物学実験、生物化学実験、微生物学実験、有機化学実験（農）」の単位修得状況・成績分布 | 3年 | | ・食品科学分野に共通する基礎的な実験技術を身に付け、実験を遂行し、データを取得することができる。 | ・実験データを的確に整理・解析することができる。 | | 9～10月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| | 卒業論文及び卒業論文発表の評価 | 4年 | | ・食品科学分野の課題を実験科学的に探求し、実験結果をまとめ、考察し、解決策を提案することができる。 | ・他者との議論を通して多面的な視点から物事の理解を深めることができる。 ・科学的な思考法を身に付け、様々な事象を論理的に考えることができる。 ・自身の学習成果を他者に分かるように説明でき、的確に質疑応答ができる。 | ・新しい知識や技術を積極的に学び続ける態度を備えている。 ・自ら課題を見出し、その解決に向けて意欲的に取り組む態度を備えている。 | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| 間接評価 | カリキュラム満足度・自己分析調査 | 3年、4年 | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |
| | 教育基盤支援機構による卒業生調査 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 2～3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（食品科学プログラム会議）。 |

10 農学部

(3) 生物資源科学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|------------------------------------|------|---|---|--|---|---------|-----|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 農学部共通基礎科目・プログラムの専門基礎科目の単位修得状況と成績分布 | 2年 | <ul style="list-style-type: none"> ・農学に関する広い学問領域の一般的基礎知識を修得し、高い倫理をもちバランスある人格形成に寄与できる。 ・農業を基盤とした経済活動の基本的知識を修得し、地球的視点からの農業の発展課題について理解している。 ・栽培植物のバイオテクノロジーや生育特性及び基本的な栽培管理法を理解し、地域農業の成立条件と関連させて説明することができる。 ・資源動物の生理・形態機能の特徴を理解し、効率的な動物生産と動物管理の仕組みについて説明できる。 ・大学で学ぶにあたって必要な基本的能力を修得している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・当該プログラムの必修科目を履修することにより生物資源科学プログラムに共通する科目の理解と実践力を高めた上で、各専門分野固有の能力を深化させることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを図表などを用いて効果的に示せるとともに、他者と論理的に議論できる。 ・自分の考えを正確かつ論理的に文章で表現できる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会に対して関心をもち、新しい知識・技術を身に付ける姿勢を備えている。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |
| | 専門科目の単位習得状況と成績分布 | 3年 | | <ul style="list-style-type: none"> ・2年次までの項目に加え下記の点を評価する ・資源動物の生産管理から流通・加工・消費に至る一連の過程を総合的に分析することができる。 ・動植物生産、地域、環境に関する課題を国際的視点から把握し、問題解決に向けた能力を身に付けることができる。 ・食料・農業・環境問題への関心を深め、各自の問題意識に沿った情報収集および分析の能力を修得できる。 ・資源植物または資源動物の遺伝、生殖、管理、生理・形態学的特性を理解し体系的に修得した知識から、先端技術を活用した効率的な農業生産を論じることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・英語を活用して会話や文章で日常的なコミュニケーションを図ることができる。 ・多様な情報源を用いて情報を正確に収集できるとともに、得られた情報を正確に分析することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・2年次までの項目に加え下記の点を評価する ・他者と協力・討論をし、共通の課題解決に取り組む態度を備えている。 ・動植物の管理や研究室活動を通じて、規則正しい生活習慣を身につけ、社会人としての基礎的な資質を身につけることができる。 | 3月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |
| | 卒業論文及び卒論発表に対する評価（ルーブリック評価） | 4年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・3年次までの項目に加え下記の点を評価する ・目標の実現や課題解決に向けて、合理的かつ具体的方策を企画立案し、遂行することができる。 ・体系的に修得した知識を基盤として、多様な事象に対して応用して思考することができる。 ・自分の考えを正確に他者に伝えることができるとともに、他者の考えを受容して、相互の考えを共有することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・3年次までの項目に加え下記の点を評価する ・目標の実現や課題の解決に向けた行動を粘り強く継続して行う態度を備えている。 ・課題の解決に向けて、自分自身で解決策を見だし、それを実行することができる。 | 2月 | 毎年 | 卒業論文指導内容ならびに方法の改善につなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |
| 間接評価 | 卒業時のアンケート調査 | 4年 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート調査 | 卒業生 | | DPに掲げられた到達目標全般の自己評価 | | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標全般に係る授業内容・方法と科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |
| | 教育基盤機構の卒業生調査 | 卒業生 | | | DPに掲げられた汎用的能力と態度・姿勢の到達目標 | | | 3年毎 | 調査結果をもとに、DPの到達目標のうち、特に汎用的能力に係る授業内容・方法と科目構成の見直しを行う（プログラム会議）。 |

10 農学部
(4) 流域環境学プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|---|--------|---|--|--|---|---------|-----|--|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 教養科目、農学部共通基礎科目、流域環境学プログラムの必修科目と選択必修科目のテストおよびレポートにより直接評価を行う。 | 2、3、4年 | ・自然科学及び社会科学に関する教養と幅広く豊かな基礎知識を身につける ・流域環境学に関する基礎知識を身につけ、生態系サービスや流域管理など流域が有する公益的機能に関する知識と理解を得る | ・水と土の保全・管理や農業施設・機械の設計管理、農業生産物の品質管理、農村計画に関する知識・技術を身につける ・持続的な森林資源の管理・保全のための地理空間情報や持続的森林管理、生態系管理に関する知識・技術を身につける | ・習得した専門知識および周辺領域の知識を土台に、自らの考えを客観的かつ論理的に説明できる | | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 |
| | 卒業研究（背景および目的、研究方法の妥当性や結果に対する論理的考察能力）について、卒業論文を査読し直接評価する。また、流域環境学演習について直接評価を行う。 | 4年 | | ・水と土の保全・管理や農業施設・機械の設計管理、農業生産物の品質管理、農村計画に関する知識・技術を身につける ・持続的な森林資源の管理・保全のための地理空間情報や持続的森林管理、生態系管理に関する知識・技術を身につける | ・習得した専門知識および周辺領域の知識を土台に、自らの考えを客観的かつ論理的に説明できる | ・社会の一員として他者との協力を通して自律的かつ持続的な問題解決に取り組むことができる ・流域環境学分野の技術者として、信頼できる倫理観と継続的に学び続けることができる | 2月 | 毎年 | 評価方法の見直しにつなげる。卒論判定会議において検討する。 |
| | 卒論中間発表会後ならびに卒論発表会後にルーブリックに基づく自己評価を実施する、 | 4年 | ・自然科学及び社会科学に関する教養と幅広く豊かな基礎知識を身につける ・流域環境学に関する基礎知識を身につけ、生態系サービスや流域管理など流域が有する公益的機能に関する知識と理解を得る | ・水と土の保全・管理や農業施設・機械の設計管理、農業生産物の品質管理、農村計画に関する知識・技術を身につける ・持続的な森林資源の管理・保全のための地理空間情報や持続的森林管理、生態系管理に関する知識・技術を身につける | 習得した専門知識および周辺領域の知識を土台に、自らの考えを客観的かつ論理的に説明できる | ・社会の一員として他者との協力を通して自律的かつ持続的な問題解決に取り組むことができる ・流域環境学分野の技術者として、信頼できる倫理観と継続的に学び続けることができる | 10月、2月 | 毎年 | 評価方法の見直しにつなげる。卒論判定会議において検討する。 |
| 間接評価 | プログラム分属時（2年次開始前）に個別面談を実施し、そこまでの振り返りと目標への到達状況を評価する。卒業研究を実施するための基礎学力・実験・解析技術が身につけているかを振り返りて評価するため、プログラム所属の学生について、適時個別面談を実施する。加えて、卒業時に学生の大学における学習についてアンケートを実施する。 | 2、3、4年 | ・自然科学及び社会科学に関する教養と幅広く豊かな基礎知識を身につける ・流域環境学に関する基礎知識を身につけ、生態系サービスや流域管理など流域が有する公益的機能に関する知識と理解を得る | | | | 4月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 |
| その他 | 卒業生調査については、教育基盤機構実施調査の結果等を活用し、プログラム会議でFDを開催し企業の意見を検討する。卒業生、雇用先を招いたキャリア説明会の場などを活用し、インタビューを実施する。 | 卒業生 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | 2月 | 3年毎 | カリキュラム、授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 |
| | 雇用先調査 | | | | | | 2月 | 3年毎 | |

10 農学部

(5) フィールド科学人材育成プログラム 【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|-------|---|--------|--|--|---|--------|---------|--|-----------|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用の能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | 教養科目、農学部共通基礎科目、流域環境学プログラムの必修科目と選択必修科目のテストおよびレポートにより直接評価を行う。 | 2、3、4年 | <ul style="list-style-type: none"> 自然科学の複数分野の基礎を理解している。 フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解している。 フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 | <ul style="list-style-type: none"> フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。 データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導くことができる。 現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身に付けている。 野外調査に不可欠な危機管理能力を身に付けている。 フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力を身に付けている。 農学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | 2月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 | |
| | 卒業研究（背景および目的、研究方法の妥当性や結果に対する論理的考察能力）について、卒業論文発表会での発表内容により評価する。また、フィールド科学演習について直接評価を行う。 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> 自然科学の複数分野の基礎を理解している。 フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解している。 フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 | <ul style="list-style-type: none"> フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。 データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導くことができる。 現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身に付けている。 野外調査に不可欠な危機管理能力を身に付けている。 フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力を身に付けている。 農学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | 2月 | 毎年 | 評価方法の見直しにつなげる。卒論判定会議において検討する。 | |
| | 卒論中間発表会後ならびに卒論発表会後にルーブリックに基づく自己評価を実施する。 | 4年 | <ul style="list-style-type: none"> 自然科学の複数分野の基礎を理解している。 フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解している。 フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 | <ul style="list-style-type: none"> フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。 データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導くことができる。 現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身に付けている。 野外調査に不可欠な危機管理能力を身に付けている。 フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力を身に付けている。 農学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | 10月、2月 | 毎年 | 評価方法の見直しにつなげる。卒論判定会議において検討する。 | |
| 間接評価 | プログラム分属時（2年次開始前）に個別面談を実施し、そこまでの振り返りと目標への到達状況を評価する。卒業研究を実施するための基礎学力・実験・解析技術が身に付いているかを振り返りで評価するため、プログラム所属の学生について、適時個別面談を実施する。加えて、卒業時に学生の大学における学習についてアンケートを実施する。 | 2、3、4年 | <ul style="list-style-type: none"> 自然科学の複数分野の基礎を理解している。 フィールド科学の学修に有用な基盤的内容について理解している。 フィールド科学分野の基礎的内容について理解でき、説明できる。 陸上動植物、森林生態系、水圏生態系の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 気圏、水圏、地圏の動態や自然現象の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 災害現象や防災の専門的な内容について、理学的な視点と農学的な視点から総合的に理解でき、説明できる。 | <ul style="list-style-type: none"> フィールド科学分野における創造的な科学的知見または問題解決策を導くことができる。 データを解析し、その結果に基づいて科学的な解釈を導くことができる。 現場での解決能力、また、フィールドを対象とした調査・解析・観測を遂行できる実践力を身に付けている。 野外調査に不可欠な危機管理能力を身に付けている。 フィールド科学分野の技術者として、信頼できる倫理観を有している。 | <ul style="list-style-type: none"> 創造性と応用力に富み課題探究のために必要な理論や技術を体系立てるデザイン能力を身に付けている。 農学の素養と専門的技能を基に、物事を正確に表現し、コミュニケーションを取ることができる。 課題解決を導く上で専門的知識と専門的技能を適切かつ正確に活用できる。 | 4月 | 毎年 | 授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 | |
| | 卒業生調査については、教育基盤機構実施調査の結果等を活用し、プログラム会議でFDを開催し企業の意見を検討する。卒業生、雇い先を招いたキャリア説明会の場などを活用し、インタビューを実施する。 | 卒業生 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | 2月 | 3年毎 | カリキュラム、授業内容・方法の見直しにつなげる。プログラム会議において検討する。 | |
| 雇用先調査 | | | | | 2月 | 3年毎 | | | |

1 1 創生学部

| | | |
|------|--------------|---|
| 基本方針 | 実施目的 | 各プログラムで定めたディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）における、プログラムの到達目標（目標としての学修成果）の到達度の評価を行い、プログラムの改善を行う。 |
| | 実施体制 | 学位プログラム評価は、学部長を責任者として、プログラムごとに行う。そのうちの学修成果の評価や改善の議論を、以下の実施計画に基づいて学務委員会で実施する。 |
| | 評価の実施及び結果の活用 | 実施計画に基づいた学修成果の評価を行い、到達目標の達成に向けた既存の教育課程や個々の授業科目・教育手法の見直し、到達目標自体の見直し等の改善につなげる。 |
| | 情報の公表 | 学修成果の評価結果や改善に関する報告を、学位プログラム評価の結果の公表を通して行う。 |

11 創生学部
創生学修プログラム

【実施計画】

| | 評価方法・指標 | 対象学年 | プログラムの到達目標（目標としての学修成果） | | | | 評価の実施時期 | 周期 | 評価結果の活用方法 |
|------|--|--------|--|---|---|---|--------------------|---|---|
| | | | 知識・理解 | 専門分野固有の能力 | 汎用的能力 | 態度・姿勢 | | | |
| 直接評価 | GPS-Academic（汎用的能力測定のための外部標準テスト） | 1・3年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・情報を抽出し吟味することができる（批判的思考力）。 ・他者との共通点・違いを理解することができる（協働的思考力）。 ・情報を関連づけ類推することができる（創造的思考力）。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自らの感情を制御すること、困難にあっても素早く立ち直ることが出来る（レジリエンス）。 ・自ら先頭立って物事を進め、未知のものにも挑戦し、粘り強くやり抜くことができる（リーダーシップ）。 ・相手の立場に立とうとし、他者と関わる積極性を備えている（コラボレーション）。 | 5月（1年次生）、10月（3年次生） | 毎年 | 学部FD（教員会議）において当該テストの結果について検討するとともに、担任教員を通じた面談指導等において活用する。また1年次から3年次までの能力の成長度合いに関する分析を通じて、学部主要科目の授業内容・方法の見直しに活用する。 |
| | リフレクションデザインⅢ（1単位。専門領域の学修総括科目） | 4年 | 学生自身が自ら選択した「領域学修」の総括をまとめることで、何が身についたのかを学修ポートフォリオに蓄積されたエビデンスなどを踏まえて確認する。 | 学生自身が自ら選択した「領域学修」の総括をまとめることで、何が身についたのかを学修ポートフォリオに蓄積されたエビデンスなどを踏まえて確認する。 | | | 2月 | 毎年 | 学務委員会において領域学修の履修状況を確認する。必要に応じて学部FD（教員会議）において教員間で情報を共有し、必要に応じて領域学修の教育体系についての改善に活用する。 |
| | リフレクションデザインⅣ（1単位。学士課程全体の学修総括科目） | 4年 | 学士課程全体の学修成果を学生自身が振り返り、エビデンスとともに「何ができるようになったのか」という観点で説明できるかどうかを確認する（具体的なエビデンスとして、学期ごとに蓄積されたNBASアセスメントシートなどをもとにした学修成果報告書を提出させる）。 | 学士課程全体の学修成果を学生自身が振り返り、エビデンスとともに「何ができるようになったのか」という観点で説明できるかどうかを確認する（具体的なエビデンスとして、学期ごとに蓄積されたNBASアセスメントシートなどをもとにした学修成果報告書を提出させる）。 | 学士課程全体の学修成果を学生自身が振り返り、エビデンスとともに「何ができるようになったのか」という観点で説明できるかどうかを確認する（具体的なエビデンスとして、学期ごとに蓄積されたNBASアセスメントシートなどをもとにした学修成果報告書を提出させる）。 | 学士課程全体の学修成果を学生自身が振り返り、エビデンスとともに「何ができるようになったのか」という観点で説明できるかどうかを確認する（具体的なエビデンスとして、学期ごとに蓄積されたNBASアセスメントシートなどをもとにした学修成果報告書を提出させる）。 | 2月 | 毎年 | 学務委員会において領域学修の履修状況を確認する。必要に応じて学部FD（教員会議）において教員間で情報を共有し、教育プログラム全般にわたる改善に活用する。 |
| | 卒業研究および卒論発表会の評価 | 4年 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の構想を関係者に提示し協議することができる。 ・複数分野の知識等を統合し、課題解決に取り組むことができる。 ・研究・課題解決の成果をプレゼンテーションすることができる。 ・研究・課題解決の成果を論文・レポートの形式にまとめることができる。 ・論理的思考と科学的根拠に基づいた課題解決ができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・人間、社会、自然に関わる現象や諸課題について、多角的・多面的な視角からアプローチし、その解決に向けて自ら主体的に取り組む姿勢を備えている。 ・分野の異なる他者と協働で課題解決に取り組む姿勢を備えている。 ・自己の人材価値を生涯にわたって能動的に高めようという姿勢を備えている。 | 1月 | 毎年 | 学務委員会（ならびに必要に応じて学部FD：教員会議）において課題解決学習（PBL）の授業内容・方法の見直しにつなげる。 |
| その他 | 卒業生に対するアンケート調査 | 卒後3年以内 | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 学務委員会（ならびに必要に応じて学生支援委員会）において調査結果をもとにDPの到達目標全般や、科目構成等の教育プログラム全般にわたる見直しを行う。 |
| | 雇用先に対するアンケート・ヒアリング調査 | | DPに掲げられた到達目標全般 | | | | | 3年毎 | 学務委員会（ならびに必要に応じて学生支援委員会）において調査結果をもとにDPの到達目標全般や、科目構成等の教育プログラム全般にわたる見直しを行う。 |
| | フィールドスタディーズ（学外学修）座談会を通じた協力機関からの授業改善意見の聴取 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・地域や産業界など様々なフィールドでの経験を踏まえて、事前に設定した到達目標への達成度を把握できる。 ・地域や産業界など様々なフィールドの現状について分析的に理解できる。 ・学外学修先での活動を通じてフィールドの活性化に寄与することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会的な課題の現状理解や課題分析につながるものの方について見識を深める。 ・2年次以降に履修する領域学修への関心について焦点化できる。 | 8月 | 毎年 | 科目担当教員会議（ならびに必要に応じて学務委員会、社会連携委員会）において、協力機関からの意見を参考に、社会と連携した授業内容・方法の見直しにつなげるとともに、必要に応じて係る到達目標に対応する科目構成の見直しを行う。 | |

(発行) 新潟大学教育基盤機構
教学マネジメント部門 学位プログラム統括室

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050番地
新潟大学学務部教務課教務企画係
kyomukikaku@adm.niigata-u.ac.jp